破戒ハムレット

破戒

登場人物

ハムレット丑松
ホレーショー銀之助
オフィリアお志保
ポローニヤス敬之進
シェイクスピア藤村

【1】

シェイクスピア藤村（以下、シェ藤村）が来る。

シェ藤村　これは過去の物語である。過去には後の時代に取って、反省すべき事柄も多い。過去こそ、真実であるからであろう。どうもシェイクスピア藤村です。
「破戒ハムレット」始めます。天長節の夜は宿直の当番であったので、ハムレット丑松とホレーショー銀之助の二人は学校に残った。

ホレーショー銀之助（以下、ホ銀之助）が来る。

シェ藤村　ポローニヤス敬之進は心細く、名残惜しくなって、いつまでも去り兼ねる様子。

ポローニヤス敬之進（以下、ポ敬之進）が来る。

シェ藤村　夕飯の後、まだ宿直室で話しこんでいるうちに、時計は八時打ち、九時打った。それは翌朝の霜の烈しさを思わせるような晩で、寒かった。ハムレット丑松が見廻りに出て行った後、ポローニヤス敬之進は火鉢に齧り付いていた。二十分ばかり経ってハムレット丑松が帰って来た。

ハムレット丑松（以下、ハム丑松）が来る。

ホ銀之助　おい、どうした？
ポ敬之進　顔色が悪いですよ。
シェ藤村　ハムレット丑松は話そうか、躊躇する。二人が見守るので。
ハム丑松　実は、不思議なことがあるんだ。

ホ銀之助　不思議なとは？
ハム丑松　校舎を一廻りして、運動場の木馬のところまで行くと、誰かが僕を呼ぶ声がした。
聞いたような声だなと思ったら、そのはずさ、僕の親父の声なんだ。
ホ銀之助　妙なことが有るものだな。
ポ敬之進　どんな風に君を呼びましたか、その声は。
ハム丑松　ハムレット丑松、ハムレット丑松とつづけざまに。
ポ敬之進　君の名前を？
ホ銀之助　馬鹿な、そんな事があるものか。
ハム丑松　確かに呼んだんだよ。親父の声だった。
ホ銀之助　本当かい？また欺《かつ》ぐつもりだろう。
ハム丑松　本当だよ。確かに聞いた。
ホ銀之助　お父さんは西乃入《にしのいり》の牧場だろう。あんな遠くから君を呼ぶなんて
馬鹿らしい。
ポ敬之進　しかし、そう一概に言ったものでもないよ。
シェ藤村　急に丑松は聞耳を立てた。顔色を変えて恐れを表したのである。
ハム丑松　や。また呼ぶ声がする。僕はもう一度行って来る。

ハム丑松、歩き回る。

シェ藤村　ホレーショー銀之助は友のことが案じられる。ポローニヤス敬之進は驚いてし
まって、何かの前兆ではあるまいかと考える。
ポ敬之進　どうも気掛かりだ。どうでしょう、我々も行って見てやっては。
ホ銀之助　そうですね。

ポ敬之進とホ銀之助、ハム丑松の後を追う。

シェ藤村　ハムレット丑松は、声のする方を辿って行った。何もかも夜の空気に包まれ、
静かに闇に隠れて居るように見える。

シェ藤村、「親父」と書かれたお面をかぶる。

ハム丑松　こっちかな？
シェ藤村（親父）ハムレット丑松、ハムレット丑松。
ハム丑松　おとっさん、おとっさん。どこですか？
ホ銀之助（ハム丑松に）やあ、こんな所にいたのか。
ハム丑松　さっき。また、親父の声が。

ポ敬之進　声が？
ホ銀之助　そんなことは理窟に合わん。きっと神経のせいだ。
ハム丑松　そうかなあ。
ホ銀之助　聞こえるはずのない声が聞えるなんて、疑心が産み出した幻さ。
ハム丑松　幻？
ホ銀之助　耳に聞える幻。いわゆる幻聴だよ。
ハム丑松　そうかも知れないけど。
シェ藤村（親父）ハムレット丑松、ハムレット丑松。
ハム丑松　おとっさん、おとっさん。
ホ銀之助　おい、君。どうした？
ハム丑松　今、また声が。
ポ敬之進　今？
ホ銀之助　何も聞こえなかったぞ。
ハム丑松　そうか。（ポ敬之進に）何か聞えましたか。
ポ敬之進　いいえ、吾輩には何も。
ホ銀之助　君以外、声は聞えない。まあ、僕は信じられないね。目で見たって信じられない。この手で触って、それからでなければ信じられない。ははははは。それはそうと、やけに寒く成ってきたな……行こうか。
ハム丑松　ああ。

ホ銀之助、去る。

ポ敬之進　翌日の朝。ハムレット丑松は父の死を知らせる電報を受けとったのである。父は西乃入の牧場で、気性の荒い種牛に襲われ亡くなった。

ホ銀之助、牛の角の様な物を持ってきて、
シェ藤村を突き刺し去る。

シェ藤村（親父）ハムレット丑松、ハムレット丑松、隠せ。たとえいかなる目に遇おうと、いかなる人に巡り合おうと決っして打明けるな、一時の感情や気の迷いで、この戒《いましめ》を破ったなら、世の中から捨てられたものと思え。隠せ。隠せ。絶対に隠せ。これが世に出て身を立てる穢多《えた》の秘訣じゃ。
ハム丑松　おとっさん、おとっさん。

【2】

シェ藤村がいる。

シェ藤村　それは忘れることの出来ない旅であった。こうして千曲川の岸に添うて、父の死の知らせで故郷へ帰って行く。足掛三年と言えば、それほど長い月日とも聞えないが、彼には一生の移り変わりの始った時代であった。心の革命が猛烈に起って、しかもそれを深く感ずるのである。

ハム丑松が来る。

ハム丑松　自分の運命を悲しみ、生涯の変転に驚いたりして、無限の感慨に沈み歩いた。人目の無い道端の枯草に倒れて、声を揚げて慟哭したいとも思った。いかんせん、泣きたくも泣くことの出来ない程、心は重く暗く閉ざされていた。

シェ藤村　飯山を離れて行けば行く程、次第に自由な天地へ出て来たような気がした。北国街道の灰色な土を踏んで、花やかな日の光を浴び、時には岡に上り桑畠の間を歩み、時にはまた街道の両側に並ぶ町々を通り過ぎて帰ったのである。

ハム丑松　山と山との間の深い谷には、青々と炭焼の煙が立登るのも見えた。当世風の紳士を乗せた一台の人力車が後ろから来る。見れば代議士の候補者の高柳利三郎。代議士の候補者に立つものは、政見を発表する為に忙しくなる時節。いずれ選挙の準備として、地方廻りに出掛けるのであろう。

ホ銀之助、「高柳」と書かれたお面を被って来る。

シェ藤村　ハムレット丑松の側《わき》を、高柳は意気揚々として、少し人を尻目にかけて、挨拶もせずに通り過ぎた。二三町離れて、高柳は急に何か思付いたように振返って見たが、ハムレット丑松は気にも留めなかった。汽車に乗るべきところへ着いたのは、午後二時頃。先に駈付けた高柳も、同じ列車を待ち合せて居たと見え、発車時間の近いた頃に休茶屋から来た。

ハム丑松　どこへ行くのだろう、あの男は。

シェ藤村　それとなく高柳の様子を窺うと、相手も注意して見るらしい。だが何となく避けるという風で、お互いに顔を知って居るというだけなので、名乗合ったことが有るでなし、二人は言葉を交そうともしなかった。発車を報せる鈴の音が鳴った。乗客はいずれも中へと急いだ。黒煙をあげ直江津の方から来た列車は停った。丑松は機関車よりの一室を選び乗った。そこに居た紳士と顔を見合せた時は、あまりの奇遇に胸を打たれたのである。

ハム丑松　猪子先生。こんにちは。
シェ藤村　紳士も、意外な処で、という驚いた顔つき。

ポ敬之進、「猪子」と書かれたお面を被って来る。

ポ敬之進（猪子）おお、ハムレット丑松君でしたか。
シェ藤村　夢寐《むび》にも忘れないその人の前に、彼は偶然にも出会ったのである。
ハム丑松　実に巡り合いの唐突で、意外で、心の底が外面《そと》に現れた光景。
シェ藤村　新聞で血を吐く重い病状と猪子蓮太郎のことを読んで、見舞状まで書いた
ハムレット丑松は、この先輩の案外元気のよいのを見て、喜びもすれば不思議にも思った。かねて心配した程に体の衰えが目につくでも無い。眼は神経質な光を帯びて、悲壮な心の内を映して見せた。早速、その事を言出して、
ハム丑松　実は新聞で見ました。東京の御宅へ宛てて手紙を上げました。
ポ敬之進（猪子）そんなことが出ていましたか。聞違えですよ。御覧の通り、旅行が出来る位ですから安心して下さい。
シェ藤村　聞いて見ると、猪子蓮太郎は赤倉の温泉へ養生に行って、帰途《かえりみち》であるとのこと。そして、同伴《つれ》の人を紹介した。

オフィリアお志保（以下オお志保）、「市村」と書かれたお面を被って来る。

ハム丑松　この紳士は、この冬打って出る候補者の一人、雄弁と男気で知られた市村弁護士であった。
オお志保（市村）ハムレット丑松君とおっしゃるんですか。私は市村です。
ポ敬之進（猪子）市村君とは、偶然、御懇意なって、今では非常に御世話になっています。
オお志保（市村）我輩こそ色々と御世話になっているので。
ハム丑松　これから市村弁護士は上田を始めとして、小諸、岩村田、臼田なぞの地方を遊説する為、政見発表の途《みち》にあるとのこと。親しく佐久小県地方の有権者を訪問して選挙を争う意気込であるとのこと。
シェ藤村　猪子はまた、この友人の応援の為、一つには自分の研究の為、しばらく信州に踏止まりたいという考えで、今宵は上田に一泊、いずれ二三日の中には弁護士と、ハムレット丑松の故郷にも出掛けて行くとのことであった。
オお志保（市村）今、飯山に御奉職《おいで》ですか。そこから候補者が出ますね。御存じですか、高柳利三郎という男を。
シェ藤村　蛇《じゃ》の道は蛇《へび》だ。丑松は駅で落合ったことから、この同じ列車に高柳利三郎も乗込んで居るということを話した。市村弁護士は不思議そうに首を傾《かし》げながら、

オお志保（市村）何処へ行くのだろう。しかし、だから汽車の旅は面白い。同じ列車の内に乗合せていても、互いに知らずにいるのですからなあ。ははは。

シェ藤村　駅々で列車が停ると、農夫の乗客が幾群か入込んだ。千曲川の水も、大な谿流の勢に変って、白波を揚げて谷底を下る。

ハム丑松　濃く青く清々とした空気は窓から流れ込んで、

シェ藤村　次第に高原へ近づいたことを感じる。やがて、汽車は上田へ着いた。旅人の多くが下りた。猪子蓮太郎たちも降りる。

ポ敬之進（猪子）いずれ根津で御目に懸ります。失敬。

ポ敬之進とオお志保、去る。

ハム丑松　再会を約束して行く先輩の後姿を見送った。

シェ藤村　ハムレット丑松は何となく物足りなかった。あれほど打解けてくれて、わけ隔てのない言葉を掛けられても、自分はどこかに他人行儀なところがあると考えて悲しくも情なくも思ったのである。

ハム丑松　先輩に対して起る心のやるせなさは、自分もまた同じように『穢多である』という事実から湧上る。秘密を隠している以上、例え他の事を話したところで、自分の想いが先輩に伝わる時はない。それを告白してしまったら、どんなに重荷が軽くなるだろう。先輩は驚いて、自分の手を執って、君もそうかと喜んでくれるだろう。そうだ、せめて先輩だけには話そう。

【3】

オお志保とシェ藤村がいる。

オお志保　蓮華寺《れんげじ》では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に引っ越しを思い立ち、借りる事にした部屋は、蔵裏《くり》続きにある二階の角のところ。

シェ藤村　寺は信州、下水内郡《しもみのちごおり》飯山町二十何ヶ寺の一つ、二階の窓に寄りかかって眺めると、銀杏の大木や飯山の町も見える。

オお志保　さすが信州第一の仏教の地、古代を眼前に見るような小都会、奇異な北国風の屋造、板葺の屋根、または冬期の雪除けとして使用する特別の軒庇《のきびさし》から、寺院と樹木の梢まで。古めかしい町の風景が香の煙の中に包まれて見える。ひと際、目立つのは、ハムレット丑松が奉職している小学校の白く塗った建物。

シェ藤村　ハムレット丑松が引っ越しを思い立ったのは、不快に感ずることが今の下宿に起ったからで、もっとも賄いでも安くなければ、誰もこんな部屋に満足するものは無かろう。壁は壁紙で張りつめて、それが茶色になって居た。粗造な床の間、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばかりで、世離れた僧坊であった。

ホ銀之助とポ敬之進が来る。

ホ銀之助　今の下宿には、半月程前、一人の男を供に連れて、下高井の地方から出て来た大日向《おおひなた》という大尽《だいじん》、飯山病院へ入院の為とあって、しばらく泊って居たことがある。入院は間もなくであった。

ポ敬之進　もとより病室は第一等、看護婦の肩に懸って長い廊下を往復するうちに、おのずと豪奢《ごうしゃ》が目について、誰が嫉妬で噂するともなく、

オお志保　あれは穢多《えた》だ。ということになった。病院中に伝わり、患者は総立ち。追い出してしまえ、それが出来ないならば、こぞって御免こうむる。

ホ銀之助　と院長を脅かすという騒動。いかに金尽《かねづく》でも、偏執《へんしゅう》には勝てない。ある日、籠に乗せられて、夕闇の空に紛れて病院を出た。籠はもとの下宿へ、院長は毎日来て診察するが、今度は下宿のものが承知しない。

ポ敬之進　不浄だ、不浄だ。

オお志保　無遠慮な人々の唇をついて出た。

シェ藤村　ハムレット丑松は憤って、あの大日向の不幸を憐れんだ。穢多の悲惨な運命を思いつづけた。ハムレット丑松もまた穢多なのである。

ホ銀之助　ハムレット丑松は純粋な北部の信州人。佐久小県《さくちひさがた》の岩石の間に成長した若者とは誰の目にも受取れる。正教員という格につけられ、学力優等の卒業生として長野の師範校を出たのは二十二の年齢《とし》。

ポ敬之進　世の中へ突出される、すぐにハムレット丑松はこの飯山へ来た。それから足掛三年目の今日、ただ熱心な青年教師として、飯山の人に知られているのみで、実際穢多である、新平民であるということは、誰一人として知るものがなかった。

ハム丑松が来る。

オお志保、「奥様」と書かれたお面を被る。

オお志保（奥様）では、いつ引っ越していらっしゃいますか。

シェ藤村　と、言ったのは蓮華寺の住職の匹偶《つれあい》。「奥様」と崇められて居るこの有髪《うはつ》の尼は、都の生活も知らないでもない口の利き振であった。

ホ銀之助　引っ越しは明日にも、今夜にも、と言いたいが、さて差当って引越しするだけの金がなかった。実際持合せは四十銭しかなかった。四十銭で引っ越しは無理だ。

ポ敬之進　今の下宿の払いもしなければならぬ。月給は明後日。それまで待つしかなかった。

ハム丑松　こうしましょう、明後日の午後ということにしましょう。

オお志保（奥様）明後日？

ハム丑松　駄目ですか？

オお志保（奥様）明後日は二十八日じゃありませんか。私は月が変ってからいらっしゃるかと思いましてサ。

ハム丑松　いや、実は急に引越しを思い立ったものですから。

シェ藤村　下宿の出来事は烈しく胸を騒がせる。

ホ銀之助　それを聞かれたり、話したりするのは怖い。

ポ敬之進　穢多に関する事は、いつも避けるようにするのが癖である。

オお志保（奥様）なむあみだぶ。なむあみだぶ。

シェ藤村　奥様は別に深く掘って聞こうともしなかった。

オお志保、「奥様」と書かれたお面を取る。

ハム丑松　蓮華寺を出たのは五時であった。書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇に抱えて、鷹匠《たかしょう》町の下宿へ帰って行った。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が群れていた。

オお志保　本町の雑誌屋は近頃出来た。店先に新着の書物を筆太に書いて張出してあった。

ハム丑松　かねて新聞広告で見て、出版の日を楽みにしていた「懺悔録」

シェ藤村　肩に猪子蓮太郎氏著、定価も書添えた広告が目につく。

ハム丑松　胸の踊るような心地がした。ズボンの袖嚢《かくし》へ手を突込んで、銀貨を鳴らして見ながら、その雑誌屋の前を行ったり来たりした。兎に角、四十銭あれば本が手に入る。だが買ってしまえば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。

オお志保　一旦は行きかけて、また引返した。ぬっと暖簾《のれん》を潜って手に取る。粗悪な黄色い表紙に「懺悔録」としてある本。智識は一種の饑渇《ひもじさ》である。四十銭を出して買い求めた。

ポ敬之進　本を抱いて鷹匠町の下宿に帰って行くと、途中で学校の同僚に出会った。

ホ銀之助　君、大層遅いじゃないか。

オお志保　友達思いのホレーショー銀之助は、すぐにハムレット丑松の顔色を見て取った。深く澄んだ目付は以前の快活な色を失って、不安の光を帯びて居たのである。

ホ銀之助　きっと体の具合でも悪いのだろう。

シェ藤村　とホレーショー銀之助は心に考えて、ハムレット丑松から下宿を探しに行った話を聞いた。

シェ藤村、去る。

ホ銀之助　君はよく下宿を取替える人だねえ。こないだ引っ越したばかりじゃないか。

ポ敬之進　その時、ハムレット丑松の持って居る本が目についたので、ホレーショー銀之助は、見せろという言葉と一緒に右の手を差出した。

ハム丑松　これかね。

ホ銀之助　むむ、「懺悔録」か。相変らず君は猪子先生のものが好きだ。新聞の広告にもあったツけ。こんな本かい。まあ君は愛読を通り越して崇拝だよ、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。さぞかしまた聞かせられることだろうなあ。

ハム丑松　馬鹿言いたまえ。

オお志保　とハムレット丑松も笑って本を受取った。夕靄《ゆうもや》は低く集って、そこ、ここに灯《あかり》がつく。丑松は明後日あたり蓮華寺へ引っ越すという話をして、この友達と別れた。

ハム丑松　やがて少し行って振返って見ると、ホレーショー銀之助は往来の片隅に佇み、こちらを見送っていた。半町ばかり行ってまた振返って見ると、まだ同じところに佇んでいるらしい。夕餐《ゆうげ》の煙は町の空をこめて、悄然《しょんぼり》とした友達の姿も黄昏がれて見えた。

オお志保とホ銀之助とポ敬之進、「ハムレット」と書かれたお面を被る。

オお志保（ハムレット）馬鹿だ！馬鹿だ、馬鹿だ。僕は、大馬鹿野郎だ。いったい、なんの為に生きているのか。朝、起きて、食事をして、うろうろして、夜になれば、寝る。人を、こわがってばかりいる。

ハム丑松　人を、こわがってばかりいる。

ホ銀之助（ハムレット）みんなに笑われるくらいが落ちさ。人に悪口を言われても、その人の敵意には気が附かず、底の知れない馬鹿とは、僕の事だ。

ハム丑松　僕の事だ。

ポ敬之進（ハムレット）どだい僕には、どんな人が偉いんだか、どんな人が悪いんだかその区別さえ、はっきりしない。淋しい顔をしている人が、なんだか偉そうに見えて仕方が無い。

ハム丑松　なんだか偉そうに見えて仕方が無い。

オお志保（ハムレット）ああ、可哀想だ。人間が可哀想だ。みんな可哀想だ。

ハム丑松　みんな可哀想だ。

ホ銀之助（ハムレット）僕には、昔から、軽蔑感も憎悪も、怒りも嫉妬も何も無かった。人の真似をして、憎むの軽蔑するのと騒ぎ立てていただけなんだ。実感としては、何もわからない。

ハム丑松　何もわからない。

ポ敬之進（ハムレット）人を憎むとは、どういう気持のものか、人を軽蔑する、嫉妬するとは、どんな感じか、何もわからない。ただ一つ、僕が実感として、この胸が浪打《なみう》つほどによくわかる情緒《じょうちょ》は、可哀想という思いだけだ。

ハム丑松　可哀想という思いだけだ。

オお志保（ハムレット）僕は、この感情一つだけで、生きて来たんだ。他《ほか》には何もわからない。けれども、可哀想だと思っていながら、僕には何も出来ないんだ。ただ、そう思ってそれを言葉で上手に言いあらわす事さえ出来ず、まして行動に於《おい》ては、その胸の内の思いと逆な現象ばかりがあらわれる。

ハム丑松　逆な現象ばかりがあらわれる。

ホ銀之助（ハムレット）なんの事は無い、僕は、何の役にも立ちやしない。ああ、可哀想だ。まったく、笑い事じゃない。みんな可哀想だ。

ハム丑松　みんな可哀想だ。

ポ敬之進（ハムレット）このごろ僕には人間がいよいよ可哀想に思われて仕方がないんだ。

ハム丑松　いよいよ可哀想に思われて仕方がないんだ。

（このページのテキスト、太宰治「新ハムレット」からの引用）

【4】

ポ敬之進とハム丑松がいる。

ポ敬之進　ハムレット丑松は畳の上へ倒れて、しばらく身動きもせずに考えていた。

ハム丑松　やがて疲れが出て眠ってしまった。不意に目が覚めて、部屋を見廻した時は、点けて置かなかった筈のランプが寂しそうに照して、夕飯の膳も置いてある。自分は未だ洋服のまま。

ポ敬之進　たぶん一時間余も眠ったらしい。外では雨の音がする。

ハム丑松　起き直り『懺悔録』の黄色い表紙を眺めた。

ポ敬之進　この本の著者、猪子蓮太郎の思想は、今の世の下層社会の『新しい苦痛』を表すと言われている。思想が剛健で、精緻《せいち》を兼ね、人を引き付ける力の溢れていることは、その著述を読んだものの誰しも感ずる特色なのである。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎という人物が穢多の中から産れたといふ事実は、ハムレット丑松の心に深い感動を与えた。

ハム丑松　私は猪子先生を先輩として慕って居るのである。

ポ敬之進　『懺悔録』は、我は穢多なりといふ文句で始めてあった。

シェ藤村、「猪子」と書かれたお面を被って来る。

シェ藤村　（猪子）我は穢多なり。同じ人間でありながら、軽蔑される道理は無い。

ポ敬之進　『懺悔録』には、著者の煩悶の歴史、悲しい過去の思い出、精神の自由を求め、しかもそれが得られないで、不調和な社会の為に苦しみぬいた経験から、朝空を望むような新しい生涯に入るまで。書きあらわしてあった。猪子蓮太郎の新しい生涯は、偶然な身のつまずきから開けたのである。

シェ藤村　（猪子）生れは信州高遠。

ポ敬之進　古い穢多の家柄ということは、長野の師範校に心理学の講師として来て居た頃、ハムレット丑松がまだ入学する前、同じ南信の地方から出て来た二、三の生徒の口から講師の中に賤民《せんみん》の子がある。この噂が全校にひろがった。

オお志保とホ銀之助が来る。

オお志保　ある人は猪子蓮太郎の人物を、ある人はその容貌を、ある人はその学識を、

ホ銀之助　いずれも穢多の生れとは思われないと言って、嘘だと言張るのであった。

ポ敬之進　出て行け、出て行け。

シェ藤村　（猪子）声は一部の教師仲間の嫉妬から起った。無理が通れば道理が引込む。

ハム丑松　この世の中に、誰が穢多の子の追放を不当だと言うものがあろう。
オお志保　いよいよ猪子蓮太郎が身の素性を自白して、
ホ銀之助　多くの校友に別れを告げて行く時、
ポ敬之進　この講師の為に思いやりの涙を流すものは、
シェ藤村　（猪子）一人もなかった。
オお志保　猪子蓮太郎は師範校の門を出て『学問の為の学問』を捨てたのである。
ハム丑松　この当時の事は『懺悔録』の中に、くわしく記載してあった。私は身につまされ何度も本を閉じ、心が締め付けられて、目を瞑った。

シェ藤村、去る。

ポ敬之進　猪子蓮太郎の筆は、面白く読ませるというよりも、考えさせる方だ。
ハムレット丑松も書いてあることを離れて、自分の一生ばかり思いつづけながら読んだ。
ハム丑松　今日まで私が平和な月日を送って来たのは、主に少年時代からの境遇にある。
オお志保　元々は小諸の向町《むかいまち》の生れ。北佐久の高原に散布する新平民の種族の中でも、ことに四十戸ばかりの一族《いちまき》の『お頭《かしら》』と言われる家柄であった。
ハム丑松　獄卒《ろうもり》と捕吏《とりて》は、維新前まで、先祖代々の職務であって、父はその報酬として、租税を免ぜられた上、別に俸米《ふち》をあてがわれた。それ程の男であるから、貧苦と零落との為、小県郡の方へ家を移した時にも、八歳のハムレット丑松を小学校へやることは忘れなかった。
ホ銀之助　私が根津村《ねづむら》の学校へ通うようになってからは、もう普通の子供で、誰も私を穢多の子と思うものはなかった。
ハム丑松　過去の記憶がハムレット丑松の胸の中に生き返った。
ポ敬之進　七つ八つの頃まで、よく他の子どもに調戯《からか》われたり、石を投げられたりした、その恐れの情がふたたび起って来た。
ハム丑松　朦朧《おぼろげ》ながらあの小諸の向町に居た頃のことを思い出した。移住する前に死んだ母親のことなぞを思い出した。
オお志保　『懺悔録』を読んで、せつない苦しみを感ずるようになった。

【5】

ホ銀之助とポ敬之進がいる。

ホ銀之助　毎月二十八日は月給の日とあって、学校では人々の顔付も引立って見えた。授業の終を告げる大鈴が鳴ると、教員たちは早々に書物を片付けて教室を出た。

ポ敬之進　悪戯盛《いたづらざか》りの少年の群は、一時に溢れて、その騒がしさ。

ホ銀之助　弁当草履を振廻し、『ズック』の鞄を肩に掛けたりして、帰って行った。

シェ藤村、「校長」と書かれたお面を被り来る。

ホ銀之助　その日は郡視学と町会議員たちが来て、校長の案内で授業を観て回った。応接室へ帰って、一同雑談で持切って、室内に籠る煙草の煙は白い渦のよう。

ポ敬之進　校長に言わせると、教育は則ち規則であった。軍隊風の教育。これが主義で、

シェ藤村（校長）時計のように正確に。これが座右の銘あり、職員を指揮する精神でもある。

ホ銀之助　この主義で押通したのが遂に成功して功績表彰の文字を彫刻した名誉の金牌《きんぱい》を授与されたのである。

ポ敬之進　その一生の記念が、応接室の机の上に置いてあった。人々の視線は黄金の輝きに集まった。町会議員はその見積りの代価を、推測したり感嘆したりして眺めた。

ホ銀之助　十八金、直径《さしわたし》九分、重量《めかた》五匁《ごもんめ》、代価およそ三十円。これが人々の一致した評価で、添えてある表彰文には、県下教育に貢献するところ尠《すくな》からずと書いてあった。町会議員は改って言った。

オお志保、「町会議員」と書かれたお面を被って来る。

オお志保（町会議員）つきましては、有志の者が寄りまして御祝の印ばかりに祝杯を差上げたいと存じますが、いかがでしょう、今晩三浦屋まで御出《おいで》を願えますか。郡視学さんも、どうか、まあ是非。

ホ銀之助、「郡視学」と書かれたお面を被る。

ホ銀之助（郡視学）いや、そういう御心配に預りましては実に恐縮します。

シェ藤村（校長）今回のことは、教育者に取りましてもこの上もない名誉な次第で、非常に私も嬉しく思っているのですが。考えて見ますと、これぞ、と言った功績が

あった私では、ない。こういう金牌を頂戴して、恥ずるような次第で。

オお志保（町会議員）校長先生、そうおっしゃっては、使いに来た私共が困ります。

シェ藤村（校長）どうですな、貴方《あなた》の御都合は。

ホ銀之助（郡視学）せっかく、ああ言って下さる。御厚意を無にするのは失礼でしょう。

シェ藤村（校長）御尤《ごもっとも》です。どうか皆さんも、よろしく仰って下さい。

ポ敬之進　実際、地方に入って教育に従事するものの第一の要件は、外でもない、この校長のような凡俗な心づかいだ。かつて学校の窓で想像した様々の高尚な事を、いつまでも考えて、俗悪な趣味を避けるようでは、一日たりとも地方の学校の校長は勤まらない。賢いと言われる教育者は、いずれも町会議員なぞに結托して、位置の堅固を計るのが普通だ。金牌を誉めそやし、町会議員は帰って行った。

オお志保（町会議員）、去る。

ホ銀之助（郡視学）見たまえ、この信濃毎日を。君が金牌を授与されたということなど、書いてあますよ。表彰文は全部。それに、履歴までも。

シェ藤村（校長）いや、今度の受賞は大変な評判になってしまいました。どこに行ってもその話が出る。実に意外な人まで知っていて、祝ってくれるような訳で。勝野君も非常に喜んでくれましてね。

ホ銀之助（郡視学）甥《おい》がですか、そうでしたろう。私のところにも長い手紙をよこしましたよ。実際、甥は貴方の為を思っているのですからな。

ポ敬之進　郡視学が甥と言ったのは、新しく赴任して来た正教員。勝野文平というのがその男の名である。新参の校長は文平を、自分の味方につけようとしていた。

シェ藤村（校長）それに引換え、ハムレット丑松君の冷淡なこと。

ホ銀之助（郡視学）ハムレット丑松君？

シェ藤村（校長）聞いて下さい。こりゃあ、私が直接に聞いたことではないのですけれど。教育者が金牌なぞを貰って鬼の首でも取ったように思うは大間違だと。そりゃ、彼に言わせたら値打ちのないものでしょうが。時代から言えば、あるいは我々の方が遅れているのかも知れません。しかし新しいものが必ずしも、いいとは限りませんからねえ。なにしろ、ハムレット丑松君が、ああして居たんじゃ、私もやりにくくて困る。同志の者ばかり集って、一致して教育事業をやるんでなけりゃあ、到底、面白くいきません。

ホ銀之助（郡視学）そんなに君が面白くないものなら、他の学校へ移すとか、後釜には君の気に入った人を入れるとかサ。

シェ藤村（校長）移すにしても、何か口実がないと。生徒たちに人望が有ますから。

ホ銀之助（郡視学）まあ私の口から甥を褒めるでも有ませんが、きっと御役に立つだろうと思いますよ。ハムレット丑松君に比べると、勝るとも劣ることは、あるまいとい

う積りだ。ハムレット丑松君なぞ、どこがいいんでしょう。どうして、
あんな教師に生徒が大騒ぎするんだか、私にはさっぱりわからんねえ。
シェ藤村（校長）先ず、猪子蓮太郎あたりの思想でしょうよ。
ホ銀之助（郡視学）むむ、あの穢多か。
シェ藤村（校長）猪子のような男の書いたものが若いものに読まれるかと思えば恐ろしい。
不健全、不健全。今の青年の思想は、どうも解りません。
ポ敬之進　その時、応接室の戸を叩く音がした。急に二人は口をつぐんだ。また叩く。
シェ藤村（校長）お入り。

ハム丑松が来る。

ハム丑松　校長先生、何か御用談中じゃ、ありませんか。
シェ藤村（校長）いえ。別に、二人で御噂をしていたところです。
ハム丑松　実はポローニヤス敬之進さんが、郡視学さんに御願いがあるそうです。
ホ銀之助（郡視学）何ですか、私に用事があると。
ポ敬之進　あの、ですね。
ホ銀之助（郡視学）どういうお話ですか。
ポ敬之進　少し。お願いしたいことがあまして。えっと。そのですね。
ハム丑松　そんなに遠慮しない方がいいじゃ、ありませんか。私から伺います。
ポローニヤス敬之進さんように退職となった場合には、恩給を受けさして頂く
訳に参りませんものでしょうか。
ホ銀之助（郡視学）無論です、そんなことは。小学校令の施行規則を出して御覧なさい。
ハム丑松　そりゃあ規則は規則ですけれど。
ホ銀之助（郡視学）規則に無いことが出来るものですか。身体が衰弱して、職務を執るに
たえないから退職する。恩給を受けられるという人は、満十五ヶ年以上在職した
ものに限った話です。彼は十四ヶ年と六ヶ月にしかならない。
ハム丑松　でも、わずか半年のことで。
ホ銀之助（郡視学）それを許したら際限が無い。恩給のことは諦めて養生なさい。
ハム丑松（敬之進に）どうです、貴方からも御願いしてみては、
ポ敬之進　いえ、今の御話を伺えば。私から御願するまでも、ありません。お言葉に従って、
諦めるより外はないと思います。

【6】

ホ銀之助とお志保がいる。

ホ銀之助　教員は職員室に集っていた。ここに集る人々は、日々の勤務と、生徒の取扱とに疲れて、さして教育の事業に興味を感ずるでもなかった。

オお志保　秋の日の光はガラス窓から射入って、煙草の煙に交る室内の空気を明るく見せた。郡視学の甥の勝野文平が、ホレーショー銀之助と並んで話している。

ホ銀之助　校長は役場から来た金の調べを終えて、それぞれ分配するばかりになった。ハムレット丑松は校長を手伝って、人々の机の上に俸給を載せていった。

オお志保　校長は改まった調子で、ポローニヤス敬之進が退職することを報告した。就いてはこの教育者の為に茶話会を開きたいと言出した。

ホ銀之助　賛成の声は起る。ポローニヤス敬之進は一礼して、やがて拍子の抜けたように席へ戻った。教員たちがポローニヤス敬之進を取り巻いて慰めて居る間に、ハムレット丑松は学校を出た。

ハム丑松が来る。

ハム丑松　月給を受取って妙に気強いような心地《こころもち》にもなった。すっかり下宿の払いを済まし、引越は成るべく目立たないように、という考えであった。気掛りは下宿の主婦《かみさん》の思惑で、追い出された大尽の間には一種の関係があって、それで引っ越すとでも思はれたら、どうしよう。下手なことを言出せば藪蛇だ。『都合があるから引っ越す。』理由は其で沢山だ。

オお志保　そして頼んで置いた荷車も来る。荷物と言えば、本箱、机、それに蒲団の包があるだけで、道具は一台の車で間に合った。ハムレット丑松は洋燈《ランプ》を持って、荷車の後について、とぼとぼと歩き、下宿の方を一寸振返って深い溜息をついた。道は悪し、車は遅し、一生の変遷《うつりかわり》を考え、自分の運命を想いながら歩いた。

ハム丑松　寂しいとも、悲しいとも、おかしいとも、何ともかとも名の附けようのない心地《こころもち》は烈しく胸の中を往来し始める。秋の空気が煙のように町々を引包んで居る。途中で紙の旗を押立てた少年の一群《ひとむれ》に出遇った。

ホ銀之助　足拍子揃えて面白可笑しく歌って来るのは尋常科の生徒だ。一緒に歌いながらくる酒酔いがある。よろよろした足元でポローニヤス敬之進と知れた。

酔ったポ敬之進が来る。

ポ敬之進　おお、ハムレット丑松君。一寸まあ見て呉れ給え。これが我輩の音楽隊さ。
オお志保　ポローニヤス敬之進は何処かで飲んで来たものと見える。少年の群は一度にどっと声を揚げて、自分達の可傷《あわれ》な先生を笑った。
ポ敬之進　始めえ
ホ銀之助　ポローニヤス敬之進は戯れに指揮するような調子で言った。
ポ敬之進　諸君。まあ聞き給え。こんにちまで我輩は諸君の先生だった。明日からは、もう諸君の先生ぢゃない。そのかわり、諸君の音楽隊の指揮をしてやる。よしか。解ったかね。あはははは。
ハム丑松　と笑ったと思うと、熱い涙はその顔を伝って流れ落ちた。音楽隊は歓呼を揚げて通り過ぎた。
オお志保　ポローニヤス敬之進は、少年の群を見送って居たが、やがて歩き初めた。
ポ敬之進　まあ、君と一緒にそこまで行こう。時にハムレット丑松君、まだこの通り日も暮れないのに、洋燈《ランプ》を持って歩くとは、どういう訳だい。
ハム丑松　私ですか。私は今引越をするところです。
ポ敬之進　引越か。それで君は何処へ引っ越すのかね。
ハム丑松　蓮華寺へ。
ホ銀之助　蓮華寺と聞いて、ポローニヤス敬之進は無言になった。しばらく、歩いてから。
ポ敬之進　ああ。実に君なぞは羨ましいよ。だって、そうぢゃないか。君なぞはまだ若いんだもの。前途多望とは君のことだ。どうかして我輩も、もう一度君のように若くなって見たいなあ。我輩のように老込んでは駄目だねえ。
オお志保　にわかに道も薄暗くなった。ポローニヤス敬之進は嘆息したり、沈吟したりして、時々絶望した人のように唐突《だしぬけ》に大きな声を出して笑った。
ハム丑松　貴方はどこまで行くんですか。
ポ敬之進　我輩かね。我輩は君を送って、蓮華寺の門前まで行くのさ。
ハム丑松　門前迄？
ポ敬之進　なぜ我輩が門前まで送って行くのか、それは君には解るまい。しかし、それを今君に説明しようとも思はないのさ。御互いに長く顔を見合せて居ても、こうして親《ちか》しくするのは昨今だ。いつか君とゆっくり話して見たいもんだねえ。
ホ銀之助　やがて蓮華寺の山門まで来ると、ポローニヤス敬之進は、ぷいと別れて行ってしまった。

【7】

ポ敬之進とホ銀之助がいる。

ポ敬之進　もとよりホレーショー銀之助はハムレット丑松の素性を知る筈がない。二人は長野の師範校に居る頃から、よく気性の合った友達であった。同じ寄宿舎の食堂に同じ引割飯の匂いを嗅いだ頃に比べると、ハムレット丑松は変った。あの憂欝。以前の快活さを失ったのは、眼付で解る、歩き方で解る、話しをする声でも解る。

ホ銀之助　何が原因で、あんなに深く沈んで行くのだろう。何かある。必ず何か訳がある。ハムレット丑松が引っ越した翌日。私は蓮華寺に尋ねて行った。途中で文平と一緒になって苔蒸《こけむ》した石の階段を上ると、咲残る秋草の径《みち》の突当ったところに本堂、左は鐘楼、右が蔵裏であった。黄ばんだ銀杏《いちょう》の樹の下で落葉を掃いて居た寺男に、ハムレット丑松君はおりますか。と聞くと、寺男は素足で蔵裏の方へ見に行った。

ポ敬之進　急にハムレット丑松の声がした。

ハム丑松が来る。

ハム丑松　まあ、あがりたまえ。

ホ銀之助　見ると二階の窓の障子を開けて、顔を差出して呼ぶのであった。私と文平は暗い梯子段をあがった。秋の日は銀杏の葉を通して部屋に射しこんで、変色した壁紙、掛けてある軸、床の間に並べた書物と雑誌など、すべて黄色に反射して見える。

ポ敬之進　机の上には例の『懺悔録』。読伏せて置いた本に気がついて、ハムレット丑松は片隅へ押隠すようにして、白い毛布を座蒲団がわりに出して薦《すす》めた。

ホ銀之助　よく君は引っ越して歩く人さ。一度、引っ越す癖が着くと、何度でも引っ越したくなるものと見える。部屋は、先の下宿の方がよさそうぢゃないか。

ポ敬之進、「文平」と書かれたお面を被る。

ポ敬之進　（文平）なぜ御引越になったんですか。

ハム丑松　どうもあそこの家《うち》は喧《やかま》しくって、寺の方が静は静だ。

ホ銀之助　何だそうだねえ、先の下宿では穢多が追い出されたそうだねえ。

ポ敬之進　（文平）そうそう、そういう話ですなあ。

ホ銀之助　だから、そんなつまらん事にでも、あの下宿が嫌になったんぢゃないかと。

ハム丑松　どうして？

ホ銀之助　こないだ、ある雑誌を読んだところが、精神病患者のことが書いてあった。
ある人がその男の住居《すまい》の側《わき》に猫を捨てた。さあ、その猫の捨ててあったのが気になって、妻君にも相談しないで、その日の中にぷいと他へ引っ越した。こういう病的な頭の人になると、捨てられた猫を見たのが引っ越しの動機になるなぞは珍しくもない、という話があったのさ。はゝゝゝゝ。僕は瀬川君を精神病患者だと言う訳では無いよ。しかし君の様子を見るのに、どこか体の具合でも悪いようだ。
ハム丑松　馬鹿なことを言いたまえ。僕は君、そんな病人ぢゃないよ。
ホ銀之助　しかし。君の身体は変調を来して居るに相違ない。夜寝られないなんて言うところを見ても、どうしても生理的に異常がある。まあ僕は、そう見た。
ハム丑松　そうかねえ、そう見えるかねえ。
ホ銀之助　見えるともサ。妄想《もうそう》、妄想。今の患者の眼に映った猫も、君の眼に映た新平民も、みんな衰弱した神経の見せる幻さ。穢多が追い出されたって何だ。当然《あたりまえ》ぢゃないか。
ハム丑松　だから君は困るよ。いつでも早呑込だ。自分で決めてしまうと、もう他の事は耳に入らないんだから。
ポ敬之進（文平）少しそういう所も有ますなあ。
ホ銀之助　引っ越し方が唐突だからさ。しかし、寺の方が勉強は出来るだろう。
ハム丑松　まえから僕は寺の生活というものに興味を持っていた。昨日の夕方、僕はこの寺の風呂に入って見た。一日働いて疲れているところだったから、入った心地《こころもち》は格別さ。明窓《あかりまど》の障子を開けると紫苑《しおん》の花なぞが咲いてるぢゃないか。風呂に入りながらキリギリスを聴くなんて、寺らしい趣味だと思ったねえ。今までの下宿とはまるで様子が違う。僕は自分の家《うち》へでも帰ったような心地《こころもち》がしたよ。
ホ銀之助　そうさなあ、普通の下宿ほど無趣味なものはないからなあ。
ハム丑松　それから君、色々なことがある。第一、鼠の多いには僕も驚いた。
ポ敬之進（文平）鼠？
ハム丑松　昨夜《ゆうべ》は僕の枕頭《まくらもと》にも来た。なれなければ、気味が悪いぢゃないか。今朝その話をしたら、奥様の言草が面白い。猫を飼って鼠を捕らせるよりか、自然に任せて養ってやるのが慈悲だ。なあに、食物さえ宛行《あてが》ってやれば、そんなに悪戯《いたづら》する動物ぢゃない。うちの鼠は温順《おとな》しいから御覧なさいッて。成程そう言われて見ると、少しも人を恐れない。白昼《ひるま》ですら出て遊んでいる。
ホ銀之助　そいつは妙だ。余程奥様という人は変った婦人《おんな》と見えるね。
ハム丑松　なに、それほど変っても居ないが、普通の人よりは宗教的なところがあるさ。
ホ銀之助　外にはどんな人がいるのかい。

ハム丑松　子坊主が一人。下女。それに庄太といふ寺男。ホラ、君等の入って来た時、庭を掃いて居た男があったろう。あれがそうだね。誰も彼男《あのおとこ》を庄太と言うものはない。みんな「庄馬鹿」と言ってる。日に五度《ごたび》ずつ、払暁《あけがた》、朝八時、十二時、入相《いりあい》、夜の十時、これだけの鐘を撞《つ》くのがあの男の勤務《つとめ》なんだそうだ。

ホ銀之助　それから、あの、なには。住職は。

ハム丑松　住職は今、留守さ。それから、ポローニヤス敬之進さんの娘で、この寺に貰われて来ている、お志保さん。

ポ敬之進（文平）へえ、ポローニヤス敬之進さんの娘ですか。

ハム丑松　そう。僕たちの来る前の年に学校を卒業した人です。

シェ藤村が来る。

シェ藤村　この日蓮華寺の台所では、先住の命日と言って、精進物《しょうじんもの》を作るので忙しかった。月々の持斎《ぢさい》には経を上げ膳を出す習慣《ならわし》であるが、この日は好物の栗飯を炊いて、仏にも供え、下宿人にも振舞いたいと言う。用意の調《ととの》った頃、奥様は台所を他《ひと》に任せて置いて、ハムレット丑松の部屋へ上って来た。ハムレット丑松も、ホレーショー銀之助も、文平も、この話好きな奥様の目には、三人の子のように映ったのである。

オお志保、「奥様」と書かれたお面を被って来る。

オお志保（奥様）なむあみだぶ。

シェ藤村　と奥様は独語のように繰返して、やがて敬之進の退職のことを尋ねる。

オお志保（奥様）そうですか。いよいよ退職になりましたか。あの酒を断ったらばとは、よく住職の言うことで、禁酒の証文を入れるまでに後悔する時はあっても、また元に戻ってしまう。飲めば困るということは知りつつ、どうしても持った病には勝てないらしいですね。それで敷居が高くなって、今では寺にも来られないような仕末。あの父親の為には、どんなにかお志保も泣いていることか。。

ハム丑松　道理で。私がこちらへ引っ越して来る時、ポローニヤス敬之進さんは門までついて来ました。なぜ門の前まで一緒に来たか、それは今、説明しようとも思はない、そう言って、ぷいと行ってしまいました。随分酔っていましたツけ。

オお志保（奥様）へえ、うちの前まで?酔っていても娘のことは忘れないんでしょうねえ。まあ、それが親子の情ですから。

ホ銀之助　ねえ、奥様。ハムレット丑松君は非常に沈んでいますねえ。

オお志保（奥様）さようさ。
ホ銀之助　君がこのお寺へ部屋を捜しに来た日だ。ホラ、僕が散歩していると、本町で君に遭遇《でつくわ》したろう。あの時、君の考え込んでいる様子と言ったら。しばらく君の後姿を見送って、何とも言い様の無い心地《こころもち》がしたね。君は「懺悔録」を持っていた。またあの先生の書いたものなぞを読んで、神経を痛めなければいいがなあと。ああいう本を読むのは、君、よくないよ。
ハム丑松　何故？
ホ銀之助　だって、君、あまり感化を受けるのはよくないからサ。
ハム丑松　感化を受けたってもよいぢゃないか。
ホ銀之助　そりゃあよい感化ならいいけれども、悪い感化だから困る。見たまえ、君が変ったのは、あの先生のものを読み出してからだ。猪子先生は穢多だから、ああいう風に考えるのも無理は無い。普通の人間に生れたものが、なにもあの真似をしなくてもよかろう、極端に悲しまなくてもよかろう。
ハム丑松　貧民とか労働者に同情を寄せるのはいかんと言うのかね。
ホ銀之助　そういう訳ではないよ。僕だって、美しい思想だとは思うさ。しかし、君のように、そう考え込んでしまっても困る。なぜ君はああいうものばかり読むのかね、なぜ君は沈んでばかりいるのかね。一体、君は何を考えているのかね。
ハム丑松　僕かい？別にそう深く考えてもいないさ。
ホ銀之助　でも何かあるだろう。
ハム丑松　何かとは？
ホ銀之助　何か原因がなければ、そんなに変る筈がない。
ハム丑松　僕は変ったかねえ。
ホ銀之助　変ったとも。師範校時代の君と違う。あの時分は、ずっと快活な人だった。もう少し他の方面へ心を向けるとか、自分を伸ばすようにしたらどうかね。こないだから僕は言おうと思っていた。身の具合でも悪いなら医者に診せて、自分で自分を救うようにするが、いいぢゃないか。
シェ藤村　しばらく座敷の中は寂《しん》として話声が絶えた。ハムレット丑松は何か思い出したことがあると見え、急に喪心した人のように成って、茫然として居たが。やがて気が付いて我に帰った頃は、顔色がすこし蒼ざめて見えた。
ホ銀之助　どうしたい、君は。はははは、妙に黙ってしまったねえ。
ハム丑松　ははははは。はははははは。
シェ藤村　ハムレット丑松は笑い紛《まぎらわ》してしまった。二人は一緒になって笑った。
ポ敬之進（文平）ホレーショー銀之助君は「懺悔録」を御読みでしたか。
ホ銀之助　いいえ、まだ読んでいません。
オお志保（奥様）何か猪子という先生の書いたものを御覧でしたか。私は未だなんにも読んで見ないんですが。

ホ銀之助　僕の読んだのは「労働」というものと、それから「現代の思潮と下層社会」あれをハムレット丑松君から借りて見ました。なかなかよいところが有ますよ、力のある深刻な筆で。

オお志保（奥様）一体　あの先生はどこを出た人なんですか。

ホ銀之助　たしか高等師範でしたろう。

ポ敬之進（文平）こういう話を聞いたことが有ましたツけ。あの先生が長野に居た時分、郷里の方でも兎に角、ああいう人を穢多の中から出したのは名誉だと言って、講習に頼んだそうです。そこで彼の先生が出掛けて行った。すると宿屋で断られて、泊る所が無かったとか。そんなことが面白くなくて長野を去るようになった、なんて。まあ、師範校を辞めてから、あの先生も勉強したんでしょう。妙な人物が新平民から飛出したものですなあ。

ホ銀之助　僕もそれは不思議に思っている。あの先生は肺病だと言うから、あるいはその病気の為に、あそこまでいったものかも知れません。

オお志保（奥様）へえ、肺病ですか。

ホ銀之助　実際病人は真面目ですからなあ。「死」という奴を眼前《めのまえ》に置いて、平素《しょっちゅう》考えているんですからなあ。あの先生の書いたものも、何となくこう人に迫るようなところがある。あれが肺病患者の特色です。

ポ敬之進（文平）ははははは、君の観察はどこまでも生理的だ。

ホ銀之助　いや、そう笑ったものでも無い。見たまえ、病気は一種の哲学者だから。

ポ敬之進（文平）して見ると、穢多がああいうものを書くんぢゃない、病気が書かせるんだ。こう成りますね。

シェ藤村　こういう話をしている間、ハムレット丑松は黙って、洋燈《ランプ》の火を熟視《みつ》めていた。自然《おのづ》と外部《そと》に表れる苦悶の情は、頬の色の若々しさに交って、一層その男らしい容貌《おもばせ》を沈欝《ちんうつ》にして見せたのである。台所の庭の方から、遠く寂しく地響きのように聞えるは、庄馬鹿が米をつく音であろう。夜も更《ふ》けた。

ホ銀之助とシェ藤村とポ敬之進、去る。

シェ藤村　友達が帰った後、ハムレット丑松は心の激昂を制《おさ》えきれないという風で、自分の部屋の内を歩いて見た。何となく胸肉《むなじし》の戦慄《ふる》えるような心地がする。先輩の侮辱された、ということは、口惜《くや》しかった。

ハム丑松　賤民だから取るに足らん。こういう無法な言草は、ただ考えて見たばかりでも、腹立たしい。ああ、種族の相違という屏擋《わだかまり》の前には、いかなる熱い涙も、いかなる至情の言葉も、いかなる鉄槌《てっつい》のような猛烈な思想も、それを動かす力は無いのであろう。

シェ藤村、「ハムレット」と書かれたお面を被る。

シェ藤村（ハムレット）多くの善良な人はこうして世に知られずに葬り去らるるのである。
今は一つとして不安に思われないものはない。深く注意した積りの自分の行為
《おこない》が、疑われるようなことに成ろうとは。まあ、考えれば考えるほど
用意が無さ過ぎた。なぜ、あの大日向が鷹匠町の宿から追放された時に、自分は
静止《じっ》としていなかったろう。なぜ、あんなに泡を食って、この蓮華寺へ
引っ越して来たのだろう。

ハム丑松　何故、先輩の本が出る度に、自分は誇り顔に吹聴したのだろう。

シェ藤村（ハムレット）何故、先輩の弁護をして、何か先輩と自分との間には一種の関係で
もあるように他《ひと》に思わせたのだろう。

ハム丑松　何故、先輩の名前を、他《ひと》の前で口に出したのだろう。何故、内証で先輩
の書いたものを買わなかったのだろう。何故、独りで部屋に隠れて、読みたい時
にそっと出して読むという知恵が出なかったのだろう。

シェ藤村（ハムレット）一夜はこういう風に、褥《しとね》の上で慄《ふる》えたり、煩悶
《はんもん》したりして、暗いところを彷徨《さまよ》ったのである。
翌日になって、いよいよ深く意《こころ》を配るように成った。過ぎ去った事は、
もう仕方がないとして、これから先を用心しよう。猪子蓮太郎の名。人物。著書。
一切、先輩に関したことは決して口に出すまい。さあ、父の与えた戒めは身に
染々と徹《こた》えて来る。

ハム丑松　決して、それとは告白《うちあ》けるな。私も二十四だ。思えばよい年齢《とし》
だ。ああ。いつまでもこうして生きたい。と願えば願うほど、
余計に穢多としての切ない自覚が湧き上るのである。
たとえ、いかなる場合があろうと、大切な戒めばかりは破るまい。

シェ藤村（ハムレット）と考えた。

【8】

シェ藤村とハム丑松がいる。

シェ藤村　郊外は収穫《とりいれ》の為に忙《せわ》しい時節であった。農夫の群はいずれも小屋を出て、午後の労働に従事していた。田んぼの稲は、すっかり刈り乾して、すでに麦さえ蒔付《まきつ》けたところもあった。一年《ひととせ》の骨折の報酬《むくい》を収めるのは今である。千曲川の下流に添う一面の平野は、宛然《あだかも》、戦場の光景《ありさま》であった。

ハム丑松　その日、私は学校から帰るとすぐに蓮華寺を出て、目的もなしに歩いた。新町の町はずれから、桑畠の間を通って、この郊外へ出たのである。積上げた藁《わら》の片隅で霜枯れた雑草の上に足を投出し、肺の底まで深く野の空気を吸入れた時は、生き返ったような心地《こころもち》になった。

シェ藤村　見れば男女の農夫。そこに親子、ここに夫婦、籾《もみ》を打つ槌《つち》の音は地に響いて、稲扱《いねこ》く音に交って勇ましく聞える。雀の群は時々空に舞揚がって、やがてまたぱッと散り乱れる。

ハム丑松　秋の日は烈しく照りつけて、男は頬冠《ほっかぶ》り、女は編笠《あみがさ》であった。めずらしく風の無い日で、汗は人々の体を流れたのである。野に満ちた光を通して、この労働の光景を眺めて居ると、よりかかった藁の側《わき》を一人の少年が通る。

シェ藤村　日に焼けた額と、柔嫩《やわらか》な目付とで、ポローニヤス敬之進の忰《せがれ》と知れた。省吾《しょうご》というのが少年の名前である。

ハム丑松　私が受け持つ高等四年の生徒なのである。

ホ銀之助、「省吾」と書かれたお面を被って来る。

ハム丑松　省吾さん、どちらへ？

ホ銀之助（省吾）あの、母さんが沖（野外）に居やすから。

ハム丑松　母さん？

ホ銀之助（省吾）あそこに。先生、あれがうちの母さんでごわす。

シェ藤村　と省吾は指差して、すこし顔を紅《あか》くした。同僚の細君の噂、それを聞かないでは無かったが、眼前《めのまえ》に働いて居る女がその人とは、すこしも知らなかった。古びた上被《うはっぱり》、茶色の帯、盲目縞《めくらじま》の手甲《てっこう》、編笠に日を避《よ》けて、身体を前後に動かしながら、踋々《せっせ》と稲の穂を扱落《こきおと》して居る。信州北部の女はよく働くことに掛けては男子にも勝る程である。烈しい気候を相手に精出す。

ハム丑松　省吾さんはまた指差して、槌を振上げて籾《もみ》を打つ男、あれは手伝いに来た旧《むかし》からの出入のもので、音作という百姓であると話した。母と彼男《あのおとこ》との間に、箕《み》を高く頭の上に載せ、少しずつ籾を振い落して居る女、あれは音作の女房であると話した。

シェ藤村　その女房が箕を振る度に、空殻《しいな》の塵《ほこり》が舞揚って、人々は黄色い灰を浴びるように見えた。省吾はまた、母の傍《わき》に居る小娘を指差して、異母《はらちがい》の妹のお作であると話した。

ハム丑松　君の兄弟は何人いるのかね。

ホ銀之助（省吾）七人。

ハム丑松　随分だねえ、七人とは。君に、姉さんに、進さんに、あの妹に、それから？

ホ銀之助（省吾）まだ下に妹が一人と弟が一人。一番うえの兄さんは兵隊で死にやした。

ハム丑松　むむ、そうですか。

ホ銀之助（省吾）その中で、死んだ兄さんと、蓮華寺へ貰われて行きやした姉さんと、わしと。これだけ母さんが違いやす。

ハム丑松　そんなら、君やオフィリアお志保さんの本当の母さんは？

ホ銀之助（省吾）もういやせん。

シェ藤村　こういう話をして居ると、継母《ままはは》の呼声が聞こえてきた。

オお志保、「まま母」と書かれたお面を被って来る。

オお志保（まま母）省吾や。おめえは、まあ、いくつに成ったら御手伝いする積りだよ。考えて見な、もう十五ぢゃねえか。母さんが言わねえだって、御手伝いするのが当然《あたりまえ》だ。高等四年にも成って、まだ皇蠡捕《いなごと》りに夢中になってるなんて、そんなものが、どこにある。これ、お作や。どうしてそんな悪戯《いたづら》するんだい。ほんとに、どいつもこいつも。見ろ、進を。よっぽど御手伝いする。

ホ銀之助（省吾）あれ、進だって遊んでいやすよ。

オお志保（まま母）遊んでるものか。さっきから御子守をしていやす。何ぞと言うと、すぐに口答えだ。母さんの言うことなぞちっとも聞きやしねえ。きっと、また蓮華寺へ寄って、姉さんに何か言付けて来たんだろう。それでこんなに遅くなったんだろう。隠れて行って見ろ、酷いぞ。

シェ藤村　ハムレット丑松はポローニヤス敬之進の家族を見たのである。あの少年も、オフィリアお志保も、細君の子では無いということが解った。

ハム丑松　細君が苦労して居るということも解った。

【9】

シェ藤村とハム丑松がいる。

シェ藤村　川舟は風変りな屋形造りで、舷《ふなべり》から下を白く化粧して赤い二本筋を横に表してある。半分を板戸で仕切って、荷積みの為に区別がしてあるので、客の座るところは細長い座敷を見るよう。人々は狭苦しい屋形の下に膝を突合せて乗った。やがて水を撃つ棹《さお》の音がした。舟底は砂の上を滑り始めた。ハムレット丑松は隅の方に両足を投出して、独り深い思に沈んで居た。

ハム丑松　今。学校の連中はどうしているだろう。友達のホレーショー銀之助はどうしているだろう。あの不幸な、ポローニヤス敬之進はどうしているだろう。蓮華寺の奥様は。お志保は、あの寺を思うと、血の湧くような心地《こころもち》になる。霙《みぞれ》は雪に変って来た。舟の中は人々の雑談で持切った。わけても高柳と一緒になった坊主、柄に無い政事上の取沙汰《とりざた》、聞く人は皆な笑い憎んだ。この坊主に言わせると、選挙は一種の遊戯で、政事家は皆な俳優に過ぎない、我々は見物して楽めば好いのだと。この言葉を聞いて、また人々が笑えば弥次馬が飛出す。

シェ藤村　いよいよ市村も切り込んで来るそうだ。

ハム丑松　と一人が言えば、

シェ藤村　そう言う君こそ御先棒に使われるんぢゃないか。

ハム丑松　と、まぜかえすものがある。弁護士の名は幾度か繰返された。それを聞く度に、高柳は不快らしい顔つき。ふふむ、と鼻の先で笑って、嘲ったように口唇を引き歪めた。

シェ藤村　こういう他《ひと》の談話《はなし》の間にも、女は高柳の側により添って、耳を澄まして、夫の機嫌を取りながら聞いて居た。大きな、ぱっちりとした眼のうちには、何となく不安の色も現れて、熟《じっ》と物を凝視《みつ》めるような沈んだところも有った。女は高柳の耳の側へ口を寄せて、何か人に知れないように囁くこともあった。

ハム丑松　どうかすると又、私の方を盗むように見た。

シェ藤村　同族の憐れみは、この美しい穢多の女を見るにつけても、丑松の胸に浮んだ。

ハム丑松　あれ程の容姿《きりょう》を持ち、富有《ゆたか》な家に生れて来たのであるから、無論相当のところに縁付かれる人だ。あんな野心家の餌なぞにならなくてもすむ人だ。可愛そうに。こう考えると同時に、女も自分と同じ秘密を持っているかと思いやると、どうもそこが気懸りでならない。よしんば自分を知っているとしたところで、それがどうした、と自分で自分に尋ねて見た。ああして囁くのは何でも無いのであろう。

シェ藤村　とはいうものの、何となく不安に思う懸念が絶えず心の底にあった。
ハム丑松　私は高柳夫婦を見ないようにと勉《つと》めた。
シェ藤村　千曲川の瀬に乗って下ること五里。ところどころの舟場へも漕ぎ寄せ、洪水のある度に流れるという粗造な船橋の下をも潜り抜けなどして、ハムレット丑松は人々とそこから岸へ上った。見れば雪は河原にも、船橋の上にも在った。小降のなかを暮れて、仄白《ほのじろ》く雪の町々。そこにも、ここにも、ちらちら灯が点く。その時、蓮華寺で撞《つ》く鐘の音が空に響き渡る。
ハム丑松　家々は、もう冬籠《ふゆごもり》の用意、軒丈ほどの高さに毎年作りつける粗末な葦簾《よしず》の雪がこいがすっかり出来上って居た。新町の通りへ出ると、一筋暗く踏みつけた町中の雪道を往ったり来たり。いづれも、夕暮を急ぐ人々ばかり。
シェ藤村　ハムレット丑松は右へ避け、左へ避けして、愛宕《あたご》町をさして急いで行こうとすると、途中で一人の少年に出逢った。
ハム丑松　近いて見ると、それは省吾くんで、酒の罎《びん》を提げて、寒そうに震えながらやって来た。

ホ銀之助、「省吾」と書かれたお面を被って来る。

ホ銀之助（省吾）あれ、ハムレット丑松先生。まあ、たまげた。
ハム丑松　君は、お使かね。
ホ銀之助（省吾）はあ。
シェ藤村　と、黒ずんだ色の罎を出して見せる。父の為に酒を買って帰って行くところであった。
ハム丑松　父さんは、お元気ですか？
ホ銀之助（省吾）父さん？あの。父さんは家に居りやすよ。
ハム丑松　家へ帰ったらねえ、父さんによろしく言って下さい。
シェ藤村　省吾は御辞儀して、ぷいと駈出して行った。

ホ銀之助、去る。

ハム丑松　私も雪の中を急いで帰って、寝た。

ハム丑松、寝る。

シェ藤村　そして翌日。

ホ銀之助、「高柳」と書かれたお面を被って来る。

ホ銀之助（高柳）御頼申《おたのもう》します。

シェ藤村　蓮華寺の蔵裏《くり》へ来て、こう言い入れた一人の紳士がある。階下《した》では、とっくに朝飯を済ましたのに、まだ丑松は顔を洗いに下りて来なかった。

ホ銀之助（高柳）御頼申します。

シェ藤村　と、また呼ぶので、下女の袈裟治はそれを聞きつけて、あわてて台処の方から飛んで出て来た。

オお志保、「袈裟治」と書かれたお面を被って来る。

オお志保（袈裟治）はい。

ホ銀之助（高柳）一寸伺いますが、ハムレット丑松さんの御宿は是方様《こちらさま》でしょうか小学校へ御出《おで》なさるハムレット丑松さんの御宿は。

オお志保（袈裟治）そうでやすよ。

ホ銀之助（高柳）何ですか、御在宿《おいで》で御座《ござい》ますか。

オお志保（袈裟治）はあ、居なさりやす。

ホ銀之助（高柳）では、是非御目に懸りたいことが有まして、こういふものが伺いましたと、どうか、そう仰って下さい。

ホ銀之助、名刺をオお志保に渡す。

オお志保（袈裟治）御待ちなすって

シェ藤村　二階の部屋へと急いだ。ハムレット丑松は、まだ寝床を離れなかった。袈裟治が枕頭《まくらもと》へ来て呼び起こした時は、客の有るということを半分夢の中で聞いて、苦るしそうに呻吟《うな》ったり、手を延ばしたりした。寝惚眼《ねぼけまなこ》を擦りながら名刺を眺めると、むっくり跳ね起きた。

ハム丑松（起きて）どうしたの、この人が。

オお志保（袈裟治）あんたを尋ねて来なさりやしたよ。

シェ藤村　しばらくの間、丑松は夢のように、手に持った名刺と下女の顔とを見比べて。

ハム丑松　この人は僕のところへ来たんぢゃないんだろう。高柳利三郎？何か間違いぢゃないか。こんな人が僕のところへ尋ねて来る筈がない。

オお志保（袈裟治）でも来なすったもの。小学校へ御出なさるハムレット丑松さんと言って。

ハム丑松　妙なことが有あるもんだなあ。この男が僕のところに。何の用があって来たんだろう。それぢゃあ、御上りなさいって、そう言って下さい。

オお志保（袈裟治）それはそうと、御飯はどうしやしょう。

ハム丑松　御飯？
オお志保（袈裟治）あれ、あんたは起きなすったばかりぢゃごわせんか。階下《した》で食べなすったら？　御味噌汁《おみおつけ》も温めてありやすにサ。
ハム丑松　よそう。今朝は食べたくない。それよりは客を下の座敷へ通して待たして置いて下さい。今、部屋を片付けるから。
シェ藤村　袈裟治は下りて行った。ハムレット丑松は部屋の内を眺め廻した。着物を着更えるやら、寝道具を片付けるやら。散乱《ちらか》ったものは皆な押入へ。床の間に置並べた本の中には、蓮太郎のものも有る。机の下へ押込んで見たが、また取出して、押入の暗い隅の方へ隠蔽《かく》すようにした。今はこの部屋の内にあの先輩の書いたものは一冊も出て居ない。
ハム丑松　こう考えて、すこし安心して、さて顔を洗うつもりで、梯子段《はしごだん》を下りた。それにしても何の用事があって、あんな男が尋ねて来たろう。わざわざやって来るとは、
シェ藤村　ハムレット丑松は客を自分の部屋へ通す前から、疑心《うたがい》と恐怖《おそれ》とで震えたのである。
ホ銀之助（高柳）始めまして、私は高柳利三郎です。かねて御名前は承って居りましたが、まだ御尋《おたず》ねするような機会もなかったものですから。
ハム丑松　よく御入来《おいで》下さいました。さあ、どうかまあこちらへ。
シェ藤村　こういう挨拶を蔵裏の下座敷で取交して、やがて丑松は二階の部屋の方へ客を導いて行った。突然なこの来客の底意の程も図りかね、相対《さしむかい》に座る前から、もう何となく気不味《きまづ》かった。
ハム丑松　どうも失礼しました。実は昨晩遅かったものですから、寝過してしまいまして。
ホ銀之助（高柳）いや私こそ、御疲労《おつかれ》のところへ。昨日《さくじつ》は舟の中で御一緒に成ました時に、何とか御挨拶を申上げようか、申上げなければ済まないが、こう存じましたのですが、あんなところで御挨拶しますのも失礼と存じまして。御見懸け申しながら、つい御無礼を。承りますれば御不幸が御有なすったそうですな。さぞ御力落しでいらっしゃいましょう。
ハム丑松　はい。飛んだ災難にあいまして、阿爺《おやぢ》も亡くなりました。
ホ銀之助（高柳）それはどうも御気の毒なことを。むむ、そうそう、こないだも貴方と豊野のステーションで御一緒に成って、それから私が下りると、貴方も御下りなさる、して見ると、貴方と私とは、往きも、還りも御一緒。何かこう因縁《いんねん》づくとでも、まあ、申して見たいぢゃ有ませんか。
シェ藤村　ハムレット丑松は答えなかった。
ホ銀之助（高柳）御縁が有ると思えばこそ、こうして御話も申上げるのですが、貴方の御心情に就きましても、御察し申して居ることも有ますし。
ハム丑松　え？

ホ銀之助（高柳）又、私の方から言いましても、少しは察して頂きたいと思いまして、
それで御邪魔に出ましたような訳なんで。
ハム丑松　どうも貴方の仰《おっしゃ》ることはよく解りません。
ホ銀之助（高柳）まあ、聞いて下さい。御聞及びでも御座いましょうが、私も世話して呉れるものが有まして、家内を迎えました。まあ、世の中には妙なことが有るもので、あの家内のが貴方を御知り申して居るのです。
ハム丑松　ははははは、奥さんが私を御存じなんですか。それがどうしました。
ホ銀之助（高柳）まあ、家内なぞの言うことですから、何が何だか解りませんけれど。しかし、不思議なことには、あいつのうちの遠い親類に当るものとかが、貴方の阿爺《おとつ》さんと昔御懇意であったとか。
シェ藤村　こう言って、高柳は熱心に丑松の様子を窺《うかが》うようにして見て、
ホ銀之助（高柳）いや、そんなことは、まあどうでもいいと致しまして、家内が貴方を御知り申して居ると言いましたら、貴方だっても御聞流しには出来ますまいし、私も私で、どうも不安心に思うことが有るものですから。貴方より外に私ども夫婦のことを知ってるものはなし、又、私たち夫婦より外に貴方のことを知ってるものは有ません――ですから、そこは御互い様に――まあ、御承知の通り、選挙も近いてまいりました。貴方に助けて頂かなければならない。もし私の言うことを聞いて下さらないとすれば、私は今、ここで貴方と刺しちがえて死にます。ははははは、まさか貴方の命を頂くとも申しませんがね、まあ、私はそれくらいの決心で参ったのです。
シェ藤村　その時、楼梯《はしごだん》を上って来る人の足音がしたので、急に高柳は口をつぐんでしまった。ついとハムレット丑松は座を離れた。唐紙を開けると、もうそこに友達が微笑みながら立って居たのである。

ホ銀之助、「高柳」と書かれたお面を取る。

ハム丑松　おお、君か。
シェ藤村　ホレーショー銀之助は一寸高柳に会釈《えしゃく》して、別にそう気に留めるでもなく、何か用事でも有るのだろう位に、早合点から独り定めに定めて、
ホ銀之助　君の好な猪子先生。あの先生が信州へ来てるそうだねえ。昨日、新聞で読んだ。
ハム丑松　新聞で？
ホ銀之助　ああ、信毎に出て居た。肺病だというけれど、元気な人だねえ。あの先生の演説を聞くと、非常に打たれるそうだ。まあ、瀬川君なぞは聞かない方がいいよ。聞けばまた病気が発《おこ》るに決まってるから。
ハム丑松　馬鹿言いたまえ。
ホ銀之助　あはははは。

シェ藤村　ハムレット丑松は黙ってしまった。身体中の機関《どうぐ》が動作《はたらき》を止めて、こうして生きて居ることすら忘れたかのようであった。
ホ銀之助　僕はこれで失敬する。
ハム丑松　まあ、いいぢゃないか。
ホ銀之助　いや、また来る。
シェ藤村　ホレーショー銀之助は出て行ってしまった。

ホ銀之助、「高柳」と書かれたお面を被る。

ホ銀之助（高柳）只今《ただいま》猪子という方の御話が出ましたが、何ですか、御懇意でいらっしゃるんですか。
ハム丑松　いいえ。別に、懇意でも有ません。
ホ銀之助（高柳）では、何か御関係が御有なさるんですか。
ハム丑松　何も関係は有ません。
ホ銀之助（高柳）そうですか
ハム丑松　だって関係のありようが無いぢゃありませんか、懇意でも何でも無い人に。
ホ銀之助（高柳）そう仰れば、まあ、そんなものですけれど。あの方は市村君と御一緒のようですから、どういう御縁故か、伺って見たいと思いまして
ハム丑松　知りません、私は。
ホ銀之助（高柳）市村という弁護士も、あれでなかなか食えない男なんです。つまり猪子という人を抱きこんで、道具に使用《つか》うという腹に相違ないんです。どうしても貴方に助けて頂かなければならない。それには先づ貴方に御縋《おすが》り申して、家内のことを世間の人に御話下さらないように。そのかわり、私もまた、貴方のことを。それ、そこは御相談で、御互様に言わないというようなことに。どうか、まあ、これは私が一生の御願いです。
ハム丑松　どうも貴方の御話は私に合点《がてん》が行きません。だって、そうぢゃ有ますまいか。なにも貴方等《あなたがた》のことを私が世間の人に話す必要も無いぢゃ有ませんか。
ホ銀之助（高柳）つまり、そんならどうして下さるという御考えなんですか。
ハム丑松　どうするもこうするも無いぢゃ有ませんか。御話はそれだけです。
ホ銀之助（高柳）無関係と仰ると？
ハム丑松　だって、私は、なんにも知らないんですから。
ホ銀之助（高柳）まあ、何とか、そこのところは御互いの身の為です。決して誰の為でも無いのです。いずれ、また私も御邪魔に伺いますから、よく考えて下さい。

【１０】

シェ藤村がいる。

シェ藤村　夕飯の後、蓮華寺では説教の支度をするので忙しかった。昔からの習慣《ならわし》として、大提灯《おおぢょうちん》がいくつとなく取出された。寺内の若僧、庄馬鹿、子坊主までよってたかって、火を点《とも》して、それを本堂へ運ぶ。三人はその為に長い廊下を行ったり来たりした。

オお志保が来る。

オお志保　説教聞きにと、こころざす人々は次第に本堂へ集って来た。

シェ藤村　寺につく檀家《だんか》のものはさらなり、すでにもう一生の行程《つとめ》を終った爺さん婆さんの群ばかりで無く、繁忙《せわ》しい職業に従う人々まで、それを聴こうとして熱心に集うのを見ても、いかに飯山の町が昔風の宗教と信仰との土地であるかを想像させる。

オお志保　聖経《おきょう》の中にある有名な文句、比喩《たとえ》などが、普通の人の会話に交るのは珍しくも無い。

シェ藤村　ハムレット丑松の身に取って、最も楽しい、又最も哀しい寺住《てらずみ》の一夜であった。どんなにハムレット丑松は胸を踊らせて、オフィリアお志保と一緒に説教聞く歓楽《たのしみ》を想像したろう。奥様を始め、省吾、オフィリアお志保は既に本堂へ上って、北の間の隅のところに集って居た。

オお志保　庄馬鹿が、自慢の羽織を折目正しく着飾って、これみよがしに人々のなかを分けて歩くのも、おかしかった。その取澄ました様子を見て奥様も笑い、私も笑った。

ハム丑松が来る。

ハム丑松　私はオフィリアお志保さんの近くに座った、髪の香が心地よくかおりかかる。提灯の影は花やかに本堂の夜の空気を照らして、一層その横顔を若々しくして見せた。何という親しげな有様だろう、こう考えて、オフィリアお志保の方を熟視《みまも》る度《たび》に、言うに言われぬ楽しさを感じた。

シェ藤村　住職は奥様と同年《おないどし》という。男のことであるから割合に若々しく、墨染《すみぞめ》の法衣《ころも》に金襴《きんらん》の袈裟《けさ》を掛け、佐久小県辺《さくちひさがたあたり》に多い世間的な僧侶に比べると、遙かに高尚な宗教生活を送って来た人らしい。

シェ藤村、「住職」と書かれたお面を被る。

シェ藤村（住職）智識のある猿は世に知らないということが無い。よく学び、よく覚え、多くの経文を暗誦して、万人の師匠ともなるべき程の学問を蓄くわえた。畜生の悲しさには、ただ一つ信ずる力を欠いた。人は、猿ほどの智識が無いにもせよ、信ずる力あって、はじめて仏の境には到り得る。人間と生れた、ありがたさ、朝夕念仏を怠り給うな。なむあみだぶ、なむあみだぶ。

オお志保　なむあみだぶ、なむあみだぶ。

シェ藤村（住職）人々の唱える声は本堂の広間に満ち溢れた。男も、女も、思い思いに賽銭《さいせん》を畳の上へ置くのであった。

ハム丑松　なむあみだぶ、なむあみだぶ。

シェ藤村（住職）やがて聴衆は珠数を提《さ》げて帰って行った。

ハム丑松、寝る。

シェ藤村（住職）、オお志保に抱き付こうとする。

オお志保、抵抗して去る。

シェ藤村、「住職」と書かれたお面を取る。

シェ藤村　次第にハムレット丑松は学校へ出勤するのが苦しくなって来た。ある日、あまりの堪えがたさに、欠席の届を差出した。その朝は遅くまで寝ていた。八時打ち、九時打ち、やがて十時打っても、まだハムレット丑松は寝ていた。袈裟治は部屋の掃除をすまして、とっくに雑巾掛《ぞうきんがけ》までしてしまった。なんどか二階へも上って来て見た。

オお志保、「袈裟治」と書かれたお面を被って来る。

シェ藤村　それは北国の冬らしい、寂しい日であった。ちいさな冬の蠅は部屋の内に残って、障子をめがけては、あちこち飛びちがっていた。朝寝の床は絶望した人を葬る墓のようなもので有ろう。

オお志保（袈裟治）先生、御客様でやすよ。

シェ藤村　と喚起《よびおこ》す袈裟治の声に驚かされて、ハムレット丑松はホレーショー銀之助が来たことを知った。準教員も勤務《つとめ》のままの服装《みなり》で一緒にやって来た。その日は、午後の課業が休みと成ったから、暇を見て尋ねて来たという。

ホ銀之助と「準教員」と書かれたお面を被ったポ敬之進が来る。

シェ藤村　ハムレット丑松は寝床の上に起直って、半ば夢のように友達の顔を眺めた。
ホ銀之助　君、寝て居たまえな。
ハム丑松　このまま失敬するよ、ナニ、君、そんなに酷《ひど》く悪くもないんだから。
ポ敬之進（準教員）風邪ですか。
ハム丑松　まあ、風邪だろうと思うんです。昨夜から非常に頭が重くて、どうしても今朝は起きることが出来ませんでした。
ホ銀之助　道理で、顔色が悪い。何か飲んで見たらどうだい。焼味噌のすこし黒焦《くろこげ》になったやつを茶漬茶椀かなんかに入れて、そこへ熱湯《にえゆ》を注込《つぎこ》んで、二三杯やって見給え。大抵の風邪は治ってしまうよ。
シェ藤村　や、好い物を持って来て、出すのを忘れたそれ、御土産《おみやげ》だ。
ホ銀之助　こう言って、風呂敷包の中から取出したのは、十一月分の月給。
ハム丑松　今日は君が来ないから、代理に受取って置いた。よく改めて見てくれ給え。
ホ銀之助　ありがとう。今日は二十八日かねえ。また二十七日だとばかり思っていた。
ハム丑松　ははははは、月給取が日を忘れるようぢゃあ仕様がない。
ポ敬之進（準教員）全く、ぼんやりして居た。
ホ銀之助　今日僕は妙なことを聞いて来た。学校の職員の中に一人新平民が隠れて居るなんて、そんなことを町の方で噂するものが有るそうだ。
ポ敬之進（準教員）誰が其様なことを言出したんだろう。
ホ銀之助　噂にもよりけりさ。よく町の人は色々なことを噂する。やれ、女の教員がどうしたの、男の教員がこうしたのツて。なぜそう人の噂がしたいんだろう。そんなら、君、まあ学校の職員を数えて見給え。穢多らしいような顔付のものがあるかい。実に怪しからんことを言うぢゃないか。なあ。
シェ藤村　こう言って、ホレーショー銀之助はハムレット丑松の方を見た。
ハムレット丑松は無言のまま。
ハム丑松　……。
ホ銀之助　ははははは。校長先生は几帳面《きちょうめん》な方だが、新平民とは思われないし、と言って、教員仲間に見当りそうも無い。いやに気取ってるのは勝野文平君だ。そんな嫌疑のかかるのは文平君ぐらいのものだ。
ポ敬之進（準教員）まさか。
ホ銀之助　そんなら、君、誰だと思う。さしづめ、君ぢゃないか。
ポ敬之進（準教員）馬鹿なことを言い給え。
ホ銀之助　君はすぐにそう怒るからいかん。
ポ敬之進（準教員）しかし。これがもし事実だと仮定すれば
ホ銀之助　事実？とうてい有得べからざる事実だ。

ポ敬之進（準教員）だから僕だっても事実だと言った訳では無いサ。もし事実だと仮定すれば、と言ったんサ。しかし万一そんなことが有るとすれば、どういう結果になって行くものだろう、僕は考えたばかりでも恐しいような気がする。

シェ藤村　二人の客はもうそれぎりこんな話をしなかった。やがて二人が言葉を残して出て行こうとした時は、丑松は喪心した人のようで、その顔色は一層蒼ざめて見えたのである。

ホ銀之助　ああ、瀬川君はまだよくないんだろう。

シェ藤村　ホレーショー銀之助は自分で自分に言いながら、準教員と帰って行った。

ホ銀之助とポ敬之進（準教員）、去る。

シェ藤村　ハムレット丑松は茫然として部屋の内を眺め廻して居たが、ふと思いついたように、押入の隅のところに隠して置いた書物を取出した。それはいずれも蓮太郎を思い出させるもので、先輩が精力を注ぎ尽した『現代の思潮と下層社会』、『平凡なる人』、『労働』、『貧しきものの慰め』、それから

ハム丑松　『懺悔録』

シェ藤村　本の中をよく改めて見て、蔵書の印がわりに捺《お》して置いた自分の認印《みとめ》を消して了った。ほかに、床の間に置並べた語学の参考書の中から、五、六冊不要なのを抜取って、塵埃《ほこり》を払って、一緒にして風呂敷に包んで居ると、そこへ袈裟治が入って来た。

オお志保、「袈裟治」と書かれたお面を被って来る。

オお志保（袈裟治）御出掛？この寒いのに御出掛なさるんですか。気分が悪くて寝て居なさる人が、まあ。

ハム丑松　いや、もうすっかり快くなった。

オお志保（袈裟治）お腹が空きやしたろう。何か食べて行きなすったら。あんたは今朝から、なんにも食べなさらないぢゃごわせんか。

ハム丑松　すこしも腹は空かない。

シェ藤村　書物の包をなるべく外套の袖で隠すようにして、蓮華寺の門を出た。

オお志保、「袈裟治」と書かれたお面を取る。

オお志保　雪は往来にも、屋根の上にもあった。人や馬の曳く雪橇《ゆきぞり》は幾台《いくつ》か丑松の側を通り過ぎた。

シェ藤村　空の模様はまた雪にでも成るか。薄い日のひかりを眺めたばかり。

オお志保　ハムレット丑松は歩きながら慄《ふる》えたのである。上町《かみまち》の古本屋にはかつて雑誌を引取って貰った。店先に客の居なかったのを幸い、ついと店に入った、例の風呂敷包を取出した。

ハム丑松　すこしばかり本を持って来ました。これを引取って頂きたいのですが。

オお志保　亭主はハムレット丑松の顔色を読んで、商人《あきんど》らしく笑って、やがて膝を進めながら風呂敷包を手前へ引寄せた。

シェ藤村、「古本屋」と書かれたお面を被る。

シェ藤村（古本屋）いかほどばかりで、御譲りに成る御積りなんですか。

ハム丑松　貴方の方で思ったところをつけて見て下さい。ナニ、いくらでも好いんですから。

シェ藤村（古本屋）どうも不景気でして、一向にこういうものが捌《は》けやせん。こちらの英語の方だけの御直段《おねだん》で、猪子さんの新刊物の方はほんの御愛嬌《ごあいきょう》こりや御持帰りに成りやした方が御為かも知れやせん。

ハム丑松　まあ、そう言わずに、引取れるものなら引取って下さい。

シェ藤村（古本屋）あまり些少《いささか》ですが、ようごわすか。そんなら、別々に申上げやしょうか。それとも籠《こ》めて申上げやしょうか。

ハム丑松　籠めて言って見て下さい。

シェ藤村（古本屋）いかがでしょう、精一杯なところを申上げて、五十五銭。

ハム丑松　五十五銭？

オお志保　とハムレット丑松は寂しそうに笑った。もとより、いくらでもいいから引取って貰う気。すぐに話は纏《まとま》った。ああ　書物ばかりは売るものでないと、思わないではないが、ここへ持って来たのは特別の事情がある。

ハム丑松　五十五銭を受取った。

シェ藤村（古本屋）去る。

ハム丑松　先生、先生。許して下さい。

オお志保　ハムレット丑松の心は暗かった。古本屋を出て、自分のしたことを考えながら歩いた時は、哭《な》きたい程の思いだった。高柳に蓮太郎と自分とは何の関係もないと言ったことを思い出した。鋭い良心の詰責《とがめ》は、胸に刺さる様な深い悲痛《いたみ》を感ずる。羞《は》ぢたり、畏《おそ》れたりしながら、

ハム丑松　どこへ行くという目的もなしに歩いた。

【11】

オお志保とハム丑松がいる。

オお志保　一ぜんめし、御酒肴《おんさけさかな》、笹屋。ハムレット丑松の足は自然とそちらの方へ向いた。表の障子を開けて入ると、二三の客もあって、のみくいしている様子。主婦《かみさん》は流許《ながしもと》へ行ったり、竈《かまど》の前に立ったりして、忙しそうに働いていた。

ハム丑松　主婦《かみ》さん、何かありますか。

オお志保　生憎《あいにく》今日《こんち》は何《なんに》もなくて御気の毒だいなあ。川魚の煮《た》いたのに、豆腐の汁《つゆ》ならごわす。と、かみさんが言った。

ハム丑松　そんなら両方貰いましょう。それで一杯飲まして下さい。

オお志保　主婦《かみさん》が傾《かし》げた大徳利の口をコップに受け、酒をなみなみと注いで貰い飲む。炉の火も燃え上った。黙って飲んだり食ったりして居ると、出て行く行商とすれ違いに釣の道具を持って入って来た男がある。

ポ敬之進が来る。

ポ敬之進　よう、めずらしい御客様が来てますね。

ハム丑松　ポローニヤス敬之進さん、釣ですか。

ポ敬之進　いや、寒いの寒くないのツて。とても川端で辛棒が出来ないから、やめて来た。

ハム丑松　ちったあ釣れましたかね。

ポ敬之進　獲物《えもの》なしサ。朝から寒い思をして、一匹も釣れない。

ハム丑松　とりあえず、一つ差上げましょう。

ポ敬之進　へえ、我輩に呉れるのかね。君から盃を貰おうとは。道理で今日は釣れない訳だ。

オお志保　寒さと酒慾とで身を震わせながら、さも甘《うま》そうに地酒を飲む。

オお志保、去る。

ポ敬之進　しばらく君には逢わなかったような気がするねえ。我輩も君、学校を休《や》めてから別にこれという用が無いもんだから、こんな釣なぞを始めて、何ですか、この雪の中で釣れるんですか。

ハム丑松　素人《しろうと》はこれだから困る。まあ商売人に言わせると、冬はまた冬で、人の知らないところに面白味がある。ナニ、風さえ無けりゃ、そう思った程でも無いよ。しかし、考えて見て呉れ給え。何が辛いと言ったって、用が無くて生きて居るほど世の中に辛いことは無いね。

ハム丑松　そうですか。

ポ敬之進　家内やなんかが、せっせと働いて居る側で、自分ばかり懐手《ふところで》して居られずサ。こうして釣に出られるような日は好いが、出られないような日と来ては、実に我輩はする事が無くて困る。ああ、実は、こないだ、久し振で娘に逢いました。

ハム丑松　え？

ポ敬之進　というのは、君、娘の方から逢ってくれろという、ことづけがあって、もっとも、我輩もね、君の知ってる通り蓮華寺とは、ああいう訳だし、成るべく娘には逢わないようにしている。ところが何か相談したいことが有ると言うもんだから、まあ、その、久し振で逢って見た。どうも若いものがずんずん大きく成るのには驚いてしまうねえ。まるで見違える位。それで何の相談かと思うと、もうどうしても蓮華寺には居られない、一日も早く家《うち》へ帰るようにして呉れ、頼む、と言う。事情を聞いて見ると無理もない。その時、我輩も始めてあの住職の性質を知ったような訳サ。

ハム丑松　性質と言うと？

ポ敬之進　こうです。よく世間には立派な人物だと言われていながら、女というものにかけて、非常に弱い性質《たち》の男があるものだね。蓮華寺の住職も矢張《やはり》そうだろうと思うよ。あれほど学問もあり、弁才もあり、ことに宗教《おしえ》の修行もして居ながら、それで迷いが出るというのは、どういう訳だろう。我輩は、信じられなかった。いや、嘘だとしか思われなかった。実に人は見かけによらないものさね。娘はもう悲いやら恐しいやらで、夜も寝られないと言う。だから、娘が家《うち》へ帰りたいと言うのは、実際無理もない。そりゃあもう一日も早く引取りたいが、家内がもうすこし解っていてくれると、どうにでもして親子でやって行かれないことも有るまいと思うけれど、現に省吾一人にすら持余して居るところへ、また娘が飛込んで来て見給え。今の家内と一緒にいられるもんぢゃ無い。第一、八人の親子がどうして食えよう。我輩の口から娘に帰れとは言われないぢゃないか。たとえ先方《さき》が親らしい行為をしないまでも、これまで育てて貰った恩義も有る。一旦蓮華寺の娘と成った以上は、どんな辛いことがあろうと決して家《うち》へ帰るな。そこを勤め抜くのが孝行というものだ。とまあ、すかしたり励《はげま》したりして、無理やりに娘を追立ててやったよ。可愛そうなものさ。

ハム丑松　知りませんでした、そんな辛い思いをしていたなんて。

ポ敬之進　吾輩は情けない父親だよ。

【12】

ホ銀之助と「校長」と書かれたお面を被ったシェ藤村がいる。

ホ銀之助　月曜の朝早く校長は小学校へ出勤した。応接室の側の一間を自分の室と定めて、毎朝授業の始まる前には、必ずそこに閉籠《とぢこも》るのが癖。それは事務の準備《したく》をする為でもあったが、又一つには職員等《たち》の不平と煙草の臭気《におい》とを避ける為で。

「文平」と書かれたお面を被ったポ敬之進が来る。

ホ銀之助　戸を叩くものが有る。その音で、すぐに校長は勝野文平ということを知った。校長はこうして、お気入りの教員から、秘密な報告を聞くのである。教員の蔭口、其他時間割と月給とに関する五月蠅《うるさい》ほどの嫉《ねた》みと争いとは、ここに居て手に取るように解るのである。こう思いながら、校長は文平をなかへ導いたのであった。いつの間にか二人は丑松の噂を始めた。

シェ藤村（校長）勝野君。君は今、妙なことを言ったね。何かハムレット丑松君のことに就いて新しい事実を発見したとか言ったね。

ポ敬之進（文平）はあ。

シェ藤村（校長）どうも君の話は解りにくくて困るよ。遠廻しに匂わせてばかり居るから。

ポ敬之進（文平）だって、校長先生、人の一生の名誉に関《かか》わるようなことを、そう迂濶《うかつ》にはしゃべれないぢゃ有ませんか。

シェ藤村（校長）ホウ、一生の名誉に？

ポ敬之進（文平）まあ、私の聞いたのが事実だとして、それがこの町へ知れ渡ったら、恐らく彼は学校にいられなくなるでしょうよ。学校にいられないばかりぢゃない、社会から追放されて、二度と世に立つことが出来なくなるかも知れません。

シェ藤村（校長）へえ。学校にも居られなくなる、社会からも追放される、と言えば君、非常なことだ。それではまるで死刑を宣告されるも同じだ。

ポ敬之進（文平）まずそう言ったようなものでしょうよ。もっとも、私が直接《ぢか》に突留めたという訳でも無いのですが、色々なことをあつめて考えて見ますと。ふふ。

シェ藤村（校長）ふふ、ぢゃ解らないねえ。まあ話して聞かせてくれ給え。

ポ敬之進（文平）しかし、校長先生、私からそんな話が出たということになりますと、すこし私も迷惑します。

シェ藤村　なぜ？

ポ敬之進（文平）何故ツて、そうぢゃ有ませんか。私が取って代りたい為に、そのようなことを言いふらしたと思われても厭ですから。毛頭、私はそんな野心がないんですから、なにも彼を中傷する為に、御話するのではないんですから。

シェ藤村（校長）解ってますよ、そんなことは。誰が君、そんなことを言うもんですか。そんな心配が要るもんですか。君だっても他の人から聞いたことなんでしょう。それ、見たまえ。

ホ銀之助　文平が思わせ振な様子をして、何か意味ありげに微笑めば微笑むほど、余計に校長は聞かずに居られなくなった。

シェ藤村（校長）では、勝野君、こういうことにしたらいいでしょう。我輩はその話を君から聞かない分にして置いたらいいでしょう。さ、誰も居ませんから、話して聞かせてくれ給え。

ホ銀之助　こう言って、校長は文平に耳を貸した。

ポ敬之進、シェ藤村に耳打ちする。

ホ銀之助　文平が何か私語《ささや》いて聞かせた時は、見る見る校長も顔色を変えてしまった。急に戸を叩く音がする。ついと文平は校長の側を離れて窓の方へ行った。戸を開けて入って来たのは

ハム丑松が来る。

ホ銀之助　ハムレット丑松で、入るや否や思わず一歩《ひとあし》逡巡《あとずさり》した。

ハム丑松　何を話して居たのだろう、この二人は。

ホ銀之助　とハムレット丑松は猜疑深《うたぐりぶか》い目付をして、二人の様子を怪まずには居られなかったのである。

ホ銀之助、去る。

ハム丑松　校長先生、どうでしょう、今日はすこし遅く始めましたら。

シェ藤村（校長）さよう、生徒は、まだ集りませんか。

ハム丑松　どうも思うように集りません。何を言っても、この雪ですから。

シェ藤村（校長）しかし、もう時間は来ました。生徒の集る、集らないは。兎に角、規則というものが第一です。どうぞ小使に言って、鈴を鳴らさせて下さい。

ハム丑松　わかりました。

ハム丑松、去る。

シェ藤村（校長）一体、君は誰から彼のことを聞いて来たのかね。
ポ敬之進（文平）妙な人から聞いて来ました。実に妙な人から
シェ藤村（校長）どうも我輩には見当がつかない。
ポ敬之進（文平）人の名誉にも関わることだから、話だけするが、名前を出してくれては困る、と先方《さき》の人も言うんです。代議士にでも成ろうという位の人物ですから、無責任なことを言う筈《はず》も有ません。
シェ藤村（校長）代議士にでも？
ポ敬之進（文平）ホラ。
シェ藤村（校長）ぢゃあ、あの新しい細君を連れて帰って来た人ぢゃ有ませんか。
ポ敬之進（文平）まあ、そこいらです。
シェ藤村（校長）して見ると。ははあ、あの先生が地方廻りでもして居る間に、どこかでそんな話を聞込んで来たものかしら。しかし、驚ろいたねえ。
ハムレット丑松君が穢多だなぞとは、夢にも思わなかった。
ポ敬之進（文平）実際、私も意外でした。まあ、聞いて下さい。こないだまで彼は鷹匠《たかしょう》町の下宿にいました。あの下宿で穢多の大尽が追い出されました。すると突然《だしぬけ》に蓮華寺へ引っ越してしまいましたろう。ホラ、おかしいぢゃ有ませんか。
シェ藤村（校長）それさ、それを我輩も思うのさ。
ポ敬之進（文平）猪子蓮太郎との関係だってもそうでしょう。あんな病的な思想家ばかりありがたく思わないだって、他にいくらも有そうなものぢゃ有ませんか。穢多の書いたものばかり特に大騒ぎしなくても好さそうなものぢゃ有ませんか。
どうも贔顧《ひいき》の仕方は普通の愛読者と少し違うぢゃ有ませんか。
シェ藤村（校長）それにしても、よく知れずに居たものさ、どうも彼の様子がおかしいと思ったよ、訳もなしに、ああ考え込む筈《はず》が無いからねえ。文平君。なるほど、君の言った通りだ。一生の名誉にも関わることだ。まあ、もう少し秘密を探って見ることにしようぢゃないか。
ポ敬之進（文平）この話が、あの代議士の候補者から出たということだけは決して言わないで下さい。さもないと、私が非常に迷惑しますから。
シェ藤村（校長）無論さ。

【13】

シェ藤村がいる。

シェ藤村　宵の勤行《おつとめ》の鉦《かね》の音は一種異様な響をハムレット丑松の耳に伝えるようになった。もう世離れた精舎《しょうじゃ》の声のようにも聞えなかった。同じ人間世界の情慾の声、という感じしか耳の底に残らない。
ハムレット丑松はポローニヤス敬之進の物語を思い浮べた。住職を卑しむ心は、卑しむというよりは怖れる心が、胸をついて湧上って来る。しかし、オフィリアお志保は香《か》のある花だ、二階へ通う廊下で、彼は彼女に逢った。

ハム丑松が来る。

ハム丑松　蒼ざめて死んだような彼女の顔付と、悲しみのある黒い眸《ひとみ》
シェ藤村　彼の眼に映るオフィリアお志保も不思議そうに顔を眺めて、喪心《そうしん》した人のような男の様子を注意して見ている。
ハム丑松　何も言えず黙って会釈《えしゃく》して別れたのである。自分の部屋へ入って独りで暗い部屋の内に座っていた。

「奥様」と書かれたお面を被ったオお志保が来る。

オお志保（奥様）先生、御勉強ですか。
シェ藤村　と声を掛けて、奥様が入って来た。
オお志保（奥様）どうぞ私に手紙を一本書いて下さいませんか、すみませんが。
ハム丑松　手紙を？
オお志保（奥様）長野の寺院《てら》に居る妹のところへ遣《や》りたいのですがね、実は自分で書かうと思いまして、書きかけては見たんです。どうも私共の手紙は、長くばかりなって、肝心の思うことが書けないものですから。いっそこりゃ貴方《あなた》に御願い申して、手短く書いて頂きたいと思いまして。いえ、なに、そんなに煩《むづか》しい手紙でも有ません。
ハム丑松　書きましょう。
シェ藤村　と引受けた。この答えに力を得て、奥様は手紙の意味を話した。
オお志保（奥様）一身上のことに就いて相談したい。この手紙　着次第《ちゃくしだい》、是非、出掛けて来るように、蟹沢から飯山までは便船も発《た》つ、もし舟が嫌なら、途中迄車に乗って、それから雪橇に乗替えて来るように、今度という今度こそは諦めた、自分はもう離縁する考えで居る。

シェ藤村　と書いてくれと頼んだ。
オお志保（奥様）他の人とは違って、貴方ですから、私もこんなことを御願いするんです。
訳を御話しませんから、不思議だと思って下さるかも知れませんが
ハム丑松　いや。私も薄々聞きました。実は、あのポローニヤス敬之進さんから。
オお志保（奥様）ホウ、そうですか。敬之進さんから御聞きでしたか。
ハム丑松　もっとも、詳しい事は私も知らないんですけれど。
オお志保（奥様）ああ、うちの和尚さんも彼年齢《あのとし》になって、まだ今度のようなことが有ると、もう私はなんにも手に着きません。一体、和尚さんの病気というのは、今更始ったことでも無いんです。先住は早く亡《な》くなりまして、和尚さんその其後へ直ったのは、まだようやく十七の年だったということでした。和尚さんの病気はもうその頃から起って居たんですね。相手の女というは、西京の魚《うお》の棚《たな》、油《あぶら》の小路《こうぢ》というところにある宿屋の総領娘、お金を遣って、女の方の手を切らせました。そこで和尚さんも、本当に懲こりなければ成らないところです。ところが持って生れた病は仕方の無いもので、それから三年経って、今度は東京にある真宗の学校へ勤めることに成ると、また病気が起りました。
シェ藤村　手紙を書いて貰いに来た奥様は、用をそっちのけにして、いろいろ並べたり訴えたりし始めた。淡泊《さっぱり》したようでもそこは女の持前で、聞いて貰わずには居られなかったのである。奥様の述懐を聞取って、ハムレット丑松は望みの通りに手紙の文句を認《したた》めてやった。幾度か奥様は口の中で仏の名を唱《とな》えながら、これから将来《さき》のことを思い煩《わづら》うという様子に見えるのであった。
オお志保（奥様）おやすみ。

オお志保（奥様）、去る。

シェ藤村　という言葉を残して奥様が出て行った後、彼は独り考えていた。
ハム丑松　それは沈静《ひっそり》とした、気の遠くなるような夜。人の起きて居る時刻では無かった。階下《した》では皆な寝たらしい。ふと、何か忍《しの》び音《ね》に泣くような若い人の声が細々と耳に入る。梯子段《はしごだん》の下あたり、暗い廊下の辺ででもあるか、誰かしら声を呑《の》む様子。尚《なお》聞くと、北の廊下の雨戸でも明けて、屋外《そと》を眺めて居るものらしい。ああ。オフィリアお志保だ。彼女のすすり泣きだ。こう思いつくと同時に、言うに言われぬ恐れと憐れみとが身を襲うように感ぜられた。

【14】

シェ藤村とハム丑松がいる。

シェ藤村　この大雪を衝《つ》いて、市村弁護士と蓮太郎の二人が飯山へ乗込んで来る、という噂は学校に居るハムレット丑松の耳にまで入った。高柳一味の党派は、今更のように防御を始めたとやら。有権者の訪問、推薦状の配付、さては秘密の勧誘なぞがしきりに行われる。高柳派の選挙の争闘《あらそい》は次第に近づいて来たのである。

ハム丑松　その日は宿直の当番として、ホレーショー銀之助と学校に居残ることに成った。もっともホレーショー銀之助は拠《よんどころ》ない用事が有ると出て行って、日暮になってもまだ帰って来なかった。

シェ藤村　ハムレット丑松は絶えず不安の状態《ありさま》暇さえあれば宿直室の畳の上に倒れて、独りで考えたり悶《もだ》えたりしたのである。

ハム丑松　入相《いりあい》を告げる蓮華寺の鐘の音が宿直室のガラス窓に響いて聞える頃、ことに烈しい胸騒ぎを覚えて、何となくオフィリアお志保の身も案じられる。さまざまの想像に耽りながら、悄然《しょんぼり》と五分心の火を熟視《みつめて》居るうちに……。

シェ藤村　寝てしまったのである。

ハム丑松　その時、お志保が入って来た。

オお志保が来る。

ハム丑松　どうしてこんなところに。

シェ藤村　お志保は何か言いたいことが有って、わざわざ自分のところへ逢いに来たのだ、あの夢見るような、柔嫩《やわらか》な眼。お志保が言おうと思うことはありありと読まれる。

オお志保　何故、父や弟にばかり親切にして、私にはよそよそしいの。何故、優しい言葉の一つも懸けてくれないの。何故、口唇《くちびる》は言いたいことも言わないで、堅く閉じ塞がって恐れと苦しみとで震えているの。

ポ敬之進、「文平」と書かれたお面を被って来る。

シェ藤村　いつの間にか文平が入って来て、用事ありげに彼女を促した。恥ずかしがる手を執《と》って、無理やりに引立てて行こうとする。

ハム丑松　勝野君、まあ待ち給え。そう君のように無理なことをしなくツても好かろう。

ポ敬之進（文平）あなたに、いいことを教えてあげる。
シェ藤村　と文平は彼女の耳へ口を寄せて、恐しい秘密をささやいて聞かせる。
ハム丑松　あッ、そんなことを聞かせてどうする。
シェ藤村　あわてて、とりすがろうとして、ふと。
ハム丑松　眼が覚めたのである。

オお志保とポ敬之進（文平）去る。

シェ藤村　我に帰ると同時に、苦しみは身を離れた。
ハム丑松　しかし夢の印象は、なお残って、覚めた後までも恐れの心が退かない。
シェ藤村　そこへ風呂敷包を擁《かか》え、戸を開けて入って来たのは
　ホレーショー銀之助であった。

ホ銀之助が来る。

ホ銀之助　や、どうも大変遅くなった、まだ起きて居たのかい。なぜ、君はそうだろう。
　僕がこういう科学書生で、平素《しょっちゅう》そっちの研究にばかり頭を突込
　んでるものだから、話したって解らない、と君は思うだろう。しかし、僕だって
　冷い人間ぢゃ無いよ。人の苦んでいるのを、傍《はた》で観て嘲笑《わら》って
　るような、そんな残酷な人間ぢゃ無いよ。
ハム丑松　また妙なことを言うね、誰も君のことを残酷だと言ったものは無いのに。
ホ銀之助　そんなら僕にだって話して聞かせてくれ給えな。
ハム丑松　話せとは？
ホ銀之助　何も君のように蔵《つつ》んで居る必要は有るまいと思うんだ。まあ、僕も、
　大いに悟ったことが有る。それからずっと君の心情《こころもち》も解るように
　成った。何故君があの蓮華寺へ引っ越したか、なぜ君が独りで苦んで居るか僕は
　もう何もかも察している。校長先生なぞに言わせると、こういうことは三文の
　価値《ねうち》も無いね。何ぞと言うと、今の青年の病気だ。しかし、君、
　考えて見給え。校長先生だって一度は若い時も有ったろうぢゃないか。だから
　僕は言ってやったよ。今日、校長先生と郡視学とで僕を呼付けて、
　「なぜ瀬川君は、ああ考え込んで居るんだろう」とこう聞くから、
　「それはあなたがたも覚えが有るでしょう、誰だって若い時は同じことです」
　と言ってやった。
ハム丑松　そうかねえ、郡視学がそんなことを聞いたかねえ。
ホ銀之助　見給え、君があまり沈んでるもんだから、だから君は誤解されるんだ。
ハム丑松　誤解されるとは？

ホ銀之助　君を新平民だろうなんて、実に途方もないことを言う人も有れば有るものだ。
ハム丑松　はははは。しかし、僕が新平民だとしたところで、一向差支はないぢゃないか。
　ああ、僕は眠くなったよ
ホ銀之助　僕は青年時代の悲しみということを考えると、いつも君の為に泣きたくなる。
　愛と名。青年を活すのもそれだし、殺すのもそれだ。実際、僕は君の心情を察している。君の慕っている人に就いても、僕は同情を寄せている。だから今夜はこんなことを言出しもしたんだが、まあ、僕に言わせると、あまり君は物を難しく考え過ぎて居るように思われるね。なにも独りで苦んでばかり居なくたっても好かろう。友達というものが有って見れば、そこはそれ相談の仕様によって、随分道も開けるというものさ、君の方から切出してくれると、およばずながら僕だって自分の力に出来るだけのことは尽すよ。
ハム丑松　ああ、そう言ってくれるのは君ばかりだ。君の志は実にありがたい。打開けて言えば、君の察してくれるようなことが有った。確かに有った。しかし
ホ銀之助　ふむ。
ハム丑松　君はまだよく事情を知らないから、それでそう言ってくれるんだろうと思う。
　実はねえ、しかしその人は、もう……。
シェ藤村　また二人は無言に帰った。しばらくして、ホレーショー銀之助は声を懸けたが、
　その時はもう　ハムレット丑松は寝ているのであった。

ホ銀之助、去る。

【15】

シェ藤村とハム丑松がいる。

シェ藤村　そして次の日。学校がすむと、ハムレット丑松は急いで蓮華寺に帰った。蔵裏《くり》の入口の庭のところに立って、奥座敷の方を眺めると、白衣を着けた一人の尼が出たり入ったりして居る。奥様に頼まれて書いた手紙のことを考えると、奥様の妹という人であろうか、こう推測が付く。下女の袈裟治が台処の方から駈寄って、彼に一枚の名刺を渡した。見れば猪子蓮太郎としてある。袈裟治は言葉を添えて、今朝この客が尋ねて来たこと、宿は上町の扇屋にとったとの事、よろしくと言置いて出て行ったことなぞを話して、外に洋服姿の人も表に立っていたと話した。

ハム丑松　むむ、きっと市村さんだ。

シェ藤村　と独語《ひとりご》ちた。話の様子では確かにそれらしいのである。

ハム丑松　直に、これから尋ねて行って見ようかしら。

シェ藤村　とは続いて起って来た考えであった。人目を憚《はばか》るということさえなくば、無論尋ねて行きたかった。鳥のように飛んで行きたかったのである。

ハム丑松　まあ、待て。書いたものを愛読してさえ、既に怪しいと思われて居るではないか。まして、うっかり尋ねて行ったりなんかして、もしや、ああ、待て、待て、日の暮れるまで待て。暗くなってから、人知れず宿屋へ逢いに行こう。

シェ藤村　こう考えて、部屋の内を歩いて居ると、唐紙の開く音がした。

ハム丑松　奥様が入って来た。

オお志保、「奥様」と書かれたお面を被って来る。

オお志保（奥様）こんなことになりやしないか、と思って私も心配していたんです。

シェ藤村　と前置をして、さて奥様は昨宵《ゆうべ》の出来事を話した。

ハム丑松　聞いて見ると、オフィリアお志保さんは郵便を出すと言って、日暮頃に門を出たっきり、もう帰って来ないとのこと。箪笥《たんす》の上に載せて置いて行った手紙は奥様へ宛てたもので。それは真心籠めて書いてあった、

シェ藤村　ところどころ涙に滲んで読めない文字すらもあったとのこと。その中には、自分一人の為に種々《さまざま》な迷惑を掛けるようでは、義理ある両親に申訳が無い。聞けば奥様は離縁の決心とやら、それだけは思いとまってくれるように、などと書いてあった。

オお志保（奥様）心配で昨夜一晩中私は眠りませんでしたよ。今朝早く人を見させにやりました。まあ、父親《おとつ》さんの方へ帰って居るらしい、

シェ藤村　奥様はもう啜上《すすりあ》げて、不幸な娘の身の上を憐むのであった。
可愛そうに、住慣《すみな》れたところを捨て、義理ある人々を捨て、
雪を踏んで逃げて行く時のその心地《こころもち》はどんなであったろう。
オお志保（奥様）和尚さんだっても眼が覚めましたろうよ、今度という今度こそは。
なむあみだぶ。

オお志保（奥様）、去る。

シェ藤村　奥様が出て行った後、しばらく丑松は古壁によりかかって居た。
ハム丑松　釣と昼寝と酒より外には働く気のない老朽な父親、泣く喧嘩する多くの子供、
就中《わけても》継母。まあ、あの家へ帰って行ったとしたところで、果してこ
れから将来《さき》どうなるだろう。言うに言われぬ悲しい心地《こころもち》
になった。
シェ藤村　急にハムレット丑松は壁を離れた。楼梯《はしごだん》を下り、廊下を通り抜け、
何か用事ありげに蓮華寺の門を出た。
ハム丑松　自分は一体何処へ行く積りなんだろう。
シェ藤村　と二三町も歩いて来たかと思われる頃、自分で自分に尋ねて見た。絶望と恐怖と
に手を引かれて、半ば夢の心地であった。往来には町の人々が群り集って、
春迄も消えずにある大雪の仕末で多忙《いそが》しそう。
ハム丑松　とある町の角のところ、塩物売る店の横手にあたって、貼付《はりつ》けてある
広告が目についた。大幅な洋紙に墨黒々と書いて、赤い『インキ』で二重に
丸なぞが付けてある。物見高く眺めて居る人々もあった。
シェ藤村　思わず彼も立留った。
ハム丑松　見ると、市村弁護士の政見を発表する会で、蓮太郎の名前も演題も一緒に書並べ
てあった。会場は上町の法福寺、その日午後六時から開会するとある。
シェ藤村　先輩の事を考えながら、千曲川の畔へ出て来た。長いこと千曲川の水を眺め佇立
《たたず》んで居た。せめて先輩だけには自分のことを話そう、ふと、思い着い
たのである。
ハム丑松　ああ月明りのおぼつかなさ。この光にはどれほどの物のかたちが見えると
言ったら好かろう。どれほどの色が潜んで居ると言ったら好かろう。煙るような
夜の空気を浴びながら、次第にこちらへやって来る人影を認めた。演説会が終っ
たところだ。聴衆の群は雪を踏んでぞろぞろ帰って来る。いづれも激昂したり、
憤慨したりして、一人として高柳を罵《ののし》らないものは無い。あるものは
市村弁護士に投票しろと呼ぶし、あるものは又、世にある多くの政事家に対して
激烈な絶望をもらしながら歩くのであった。蓮太郎の演説は深い感動を町の
人々に伝えたらしい。

シェ藤村　行って逢おう。こう考えて、夢のように歩いた。ぶらりと扇屋の表に立って、軒行燈の影に身を寄せながら、なかの様子を覗いて見ると、何かこう取込んだことでも有るかのように人々が出たり入ったりして居る。亭主であろう、五十ばかりの男、周章《あわただ》しそうに草履を突掛けながら、提灯《ちょうちん》携げて出て行こうとするのであった。呼留めて、蓮太郎のことを尋ねて見て、亭主の口から意外な報知《しらせ》を聞取った。

ハム丑松　法福寺の門前で先輩が襲われたということを聞取った。真実《ほんと》か、虚言《うそ》か。もし事実だとすれば、無論。高柳の復讐に相違ない。亭主の後について法福寺の方へと急いだ。

シェ藤村　彼が駈付けた時は、もう間に合はなかった。弁護士ですら間に合はなかった。聞いて見ると、蓮太郎は一歩《ひとあし》先へ帰ると言って外套《がいとう》を着て出て行く、市村弁護士は残って後仕末をして居たとやら。傷というは石か何かで烈しく撃たれたもの。たださえ病弱な身、まして疲れた後。

ハム丑松　何の抵抗《てむかい》も出来なかったらしい。血は雪の上を流れていた。

シェ藤村　思わず先輩の耳の側へ口を寄せた。

ハム丑松　猪子先生。私です。先生。

シェ藤村　なんと呼んで見ても、月の光は青白く落ちて、死の思いを添えるのであった。蒼《あお》ざめた先輩の頬へ自分の頬を押宛てて、

ハム丑松　先生、先生。

シェ藤村　そして亭主は、だらりと垂れた蓮太郎の手を胸の上に組合せた。戸板に載せ、上から外套を懸けて、扇屋を指して出掛けた頃は、月も落ちかかって居た。

ハム丑松　さくさくと音のする雪を踏んで、先輩の一生を考えながらついて行った。

シェ藤村　我は穢多を恥とせず。先輩の言葉が心に浮かんだ。この時に成って、ハムレット丑松も気がついたのである。

ハム丑松　自分は隠蔽《かく》そうとして、持って生れた自然の性質を銷磨《すりへら》して居た。その為に一時《いっとき》も自分を忘れることが出来なかった。今迄の生涯は虚偽《いつわり》の生涯だった。自分で自分を欺《あざむ》いて居た。ああ何を思い、何を煩う。我は穢多なり。

シェ藤村　死んだ先輩に手を引かれて、新しい世界へ連れて行かれるような心地がした。それは今まで思いもよらなかった考えだった。

ハム丑松　告白。明日、学校へ行って打ち明けよう。教員仲間にも、生徒にも話そう。

シェ藤村　そう決心して、生徒に言って聞かせる言葉、進退伺いに書いて出す文句、その他の色々なことも想像した。彼は新しい暁《あかつき》の近づいたことを知った。

【16】

ハム丑松がいる。

ハム丑松　学校へ行く支度をする為に、朝早く蓮華寺へ帰った。庄馬鹿を始め、子坊主迄、談話《はなし》は猪子先生の最後、高柳の噂で持切って居た。昨日の朝、私の留守へ尋ねて来た客が亡くなったその人である、と聞いた時は、一同驚き呆れた。私はまた奥様から、妹が長野の方へ帰るように成ったこと、住職が手を突いて詫入《わびい》ったこと、夫婦別れの話も。見合せにしたということを聞いた。いつも寺では早く朝飯《あさはん》を済《すま》すところからして、部屋へも袈裟治が膳を運んで来た。こうして寺の人と同じように早く食うということは、近頃無い。朝は必ず生温《なまあたたか》い飯に、煮詰った汁ときまって居たのが、その日にかぎっては、飯も焚きたての気《いき》の立つやつで、汁は又、煮立つたばかりの赤味噌のにおいがうまそうに鼻の端《さき》へ来る。小皿には好物の納豆もついた。膳に向いながら、兎も角もこうして生きながらえ来た今日迄《こんにちまで》を不思議にありがたく考えた。穢多の子の身であると覚期《かくご》すれば、飯を食うにも我知らず涙がこぼれた。朝飯の後、私は机に向って進退伺を書いた。冬の朝日が射して来た。障子を開けて眺めると、銀杏《いちょう》の梢《こずえ》に、雪に包まれた町々の光景が見渡される。家と家との間からは青々とした朝餐《あさげ》の煙が静かに立登った。小学校の建築物《たてもの》も、今、日をうけた。名残惜《なごりを》しいような気に成って、ややしばらく眺め入って居たが、胸に浮んだは『懺悔録』、開巻第一章、『我は穢多なり』と書起してあったのを今更のように新しく感じて、この町の人々に告白するように、その文句を窓のところで繰返した。我は穢多なり。

ポ敬之進が来る。

ポ敬之進　彼は蓮華寺の山門を出た。とある町の角のところまで歩いて行くと、向こうから巡査に引かれて来る四五人の男に出逢《であ》った。いづれも腰縄を附けられ、蒼ざめた顔付して、人目を憚《はばか》りながら通る。中に一人、黒の紋付羽織、白足袋　穿《ばき》、顔こそ隠して見せないが、当世風の紳士姿は、すぐに高柳利三郎と知れた。よく見ると、一緒に引かれて行く怪しげな風体の人々は、高柳の為につかわれた壮士らしい。

ハム丑松　見る見る高柳の一行は巡査の言うなりに町の角を折れて、やがて雪山の影に隠れてしまった。

ポ敬之進　学校の運動場には雪が積上げてあった。

ハム丑松　玄関も、廊下も、広い体操場も、楽しそうな叫び声で満ちあふれて居た。
授業の始まるまで、最後の監督をする積りで、あちこちこちと廻って歩くと、
大鈴の音が響き渡ったのは間も無くであった。生徒は互いに上草履鳴して、
我勝《われがち》に体操場へと塵埃《ほこり》の中を急ぐ。
ポ敬之進　やがて男女の教師は受持受持の組を集めた。高等四年の生徒は後について、
一緒に長い廊下を通った。授業だけは無事に済した上で、湧上《わきあが》る
胸の思を制《おさ》えながら、彼は三時間目の習字を教えた。
ハム丑松　午後の課目は地理と国語とであった。五時間目には、国語の教科書の外に、
習字の清書、作文の帳面、そんなものを一緒に持って教室へ入ったので、それと
見た好奇《ものずき》な少年はもう眼を円くする。それを自分の机の上に載せて、
例のように教科書の方へ取掛ったが、やがていつもの半分ばかりも講釈したと
ころで本を閉ぢて、少し話すことが有る、と言って生徒一同の顔を眺め渡すと、

ハム丑松、「ハムレット」と書かれたお面を被る。
オお志保、「生徒」と書かれたお面を被って来る。

オお志保（生徒）先生、御話ですか。
ハム丑松　ああ。皆さんに少し話す事があります。

ホ銀之助、「生徒」と書かれたお面を被って来る。

ホ銀之助（生徒）御話、御話
ポ敬之進　と請求する声は教室の隅から隅までも拡《ひろが》った。

ポ敬之進、「生徒」と書かれたお面を被る。

ハム丑松　私は習字やら、図画やら、作文の帳面やらを生徒の手に渡した。中には、朱で点
を付けたのもあり、優とか佳とかしたのもあった。または、全く目を通さないの
もあった。先ず其詑《そのわび》から始めて、なおしてやりたいは遣りたいが、
もうそれをする暇が無いということを話し、こうして一緒に稽古をするのも
今日限りであるといふことを話し、自分は別離《わかれ》を告げる為にここに
立って居るということを話した。

シェ藤村、「生徒」と書かれたお面を被って来る。

シェ藤村（生徒）別れを告げるって、先生まさか。

ポ敬之進（生徒）どういう事ですか？

ハム丑松　皆さんも御存じでしょう。この山国に住む人々を分けて見ると、おおよそ五通りに別れて居ます。それは旧士族と、町の商人と、お百姓と、僧侶《ぼうさん》と、それからまだ外に穢多という階級があります。まあ、穢多というものは、卑賤《いや》しい階級としてあるのです。もしその穢多がこの教室へやって来て、皆さんに国語や地理を教えるとしましたら、その時皆さんはどう思いますか、皆さんの父親《おとつ》さんや母親《おつか》さんは、どう思いましょうか。実は、私はその卑賤《いや》しい穢多の一人です。どうぞ私の言うこと、よく覚えて置いて下さい。これから五年十年と経って、皆さんが小学校時代のことを考える時に。あの教室で、先生に習ったことが有ったツけ。あの穢多の教員が素性を告白《うちあ》けて、別れを述べた事を思い出して頂きたいのです。私は卑賤《いや》しい生れでも、皆さんが立派な考えを御持ちなさるように、それを心掛けて教えた積りです。皆さんが御家へ御帰りに成りましたら、どうぞ父親《おとつ》さんや母親《おっか》さんに私のことを話して下さい。今まで隠蔽《かく》して居たのは全くすまなかった、と言って、皆さんに告白《うちあ》けたことを話してください。私は穢多です、不浄な人間です。許して下さい。

ハム丑松、「ハムレット」と書かれたお面を取り、投げ捨てひざまずく。

シェ藤村（生徒）後列の方の生徒は急に立上った。一人立ち、二人立ちして、眺めるうちに、

オお志保（生徒）この教室に居る生徒は総立ちに成った。その時大鈴の音が響き渡った。

ホ銀之助（生徒）教室の戸が開いた。他の組の生徒も教師も出て来た。

ポ敬之進（生徒）ポローニヤス銀之助は職員室で、ハムレット丑松のことを耳に入れた。

オお志保（生徒）思わずポローニヤス銀之助は職員室を飛出した。

ホ銀之助、「生徒」と書かれたお面を取る。

ホ銀之助　玄関を横切って、左右に馳違《はせちが》う少年の群を分けて、高等四年の教室に行ってみると、廊下のところに校長、教師五六人、中に文平も、その他高等科の生徒が彼をとりまいて居たのである。（ハム丑松に）君、大丈夫が？

ハム丑松　許してくれ給え。

ホ銀之助　解った、解った、君の心地《こころもち》はよく解った。むむ、進退伺いも用意して来たね。後の事は僕に任せるとして、君はすぐに帰り給え。

ハム丑松　許してくれ給え。私は、私は穢多です。

【17】

ホ銀之助とシェ藤村がいる。

シェ藤村　ホレーショー銀之助はポローニヤス敬之進の住居《すまい》を訪れた。
友達思いの彼は心配しながら、ハムレット丑松を追って尋ねて来たのであった。
ホ銀之助　一寸伺いますが、ハムレット丑松君はこちらへ参りませんでしたろうか。

オお志保が来る。

オお志保　あれ、今御帰りに成ましたよ。
ホ銀之助　今？それからどっちの方へ行きましたろう、御存じは有ますまいかしら。
オお志保　あの、猪子さんの奥様が東京から御見えに成るそうですね。多分その方へ。ホラ市村さんの御宿の方へ尋ねていらしツたんでしょう。
ホ銀之助　市村さんのところへ？　実は僕も非常に心配しましてね、蓮華寺へ行って聞いて見ました。まだ学校から帰らんという。それから市村さんの宿へ行って見ると、あすこにも居ません。こりゃ、ここかも知れない、そう思ってやって来たんです。
オお志保　行違いに、おなんなすったんでしょう。まあ御上りなすって下さいませんか、
シェ藤村　と言われて、炉辺《ろばた》へ上った。オフィリアお志保の頬には涙のあとが乾かずにあった。どういうことを言ってハムレット丑松が別れて行ったか、彼女の顔つきで胸に浮ぶ。どうかして友達を助けたい、そうと思うのであった。
ホレーショー銀之助はオフィリアお志保の身の上から聞き初めた。彼女は、すぐに、彼の頼もしい気象を看て取ったのである。ハムレット丑松と無二の朋友であるということも好く承知して居る。
オお志保　本当に自分の心地《こころもち》も解って、身を入れて話を聞いてくれるのはこの人だ、どうして父親のところへ帰って居るか、それを尋ねられた時はもう胸一ぱいに成ってしまった。蓮華寺を脱けて出ようと決心するまでの一伍一什《いちぶしじゅう》何から話していいものやら、解らない位。
シェ藤村　娘心の感じ易さ、暗く煤《すす》けた土壁の内部《なか》の光景《ありさま》をも恥ずかしく思うという風で、着物の前を掻合せ聞かせる。
ホ銀之助　あの寺を出ようと思い立ったのは、泣いて、泣いて、泣尽した揚句のこと。だから、何処へ帰るという目的《めあて》も無かったのである。
シェ藤村　悲しい夢のように歩いて来る途中、雪の上に倒れて居る人に出逢った。見ればその酔漢《さけよい》は父であった。オフィリアお志保は父がもう凍え死んだのかと思った。丁度通りかかる音作を呼留めて、一緒に助け起して、やっとのことで家まで連帰って見ると、少し遅かろうものなら命をとられるところ。

ホ銀之助　医者の話によると、身体の衰弱《おとろえ》は一通りで無い。助かる見込は有るまいとのこと。そればかりでは無い。不幸《ふしあわせ》はこの屋根の下にも待受けて居た。来て見ると、継母も、異母《はらちがい》の弟妹《きょうだい》も居なかった。その前の晩、烈しい夫婦喧嘩があって、継母は泣叫んだという。

シェ藤村　下高井にある生家《さと》を指して、三人だけ子供を連れて、父の留守に家出をしたものらしい。それは継母が自分で産んだ子供のうち、三番目のお末を残して、進に、お作に、それから留吉と、こう引連れて行った。割合に温順《おとな》しいお末を置いて、あの厄介者のお作を腰に付けたは、流石に後のことをも考えて行ったものと見える。こういう中に、ひとり力に成るのは音作で、毎日夫婦して来て、物をくれるやら、旧《むかし》の主人をいたわるやら、お末をば世話すると言って、自分の家の方へ引取って居るとのこと。

ホ銀之助　して見ると。今御家にいらっしゃるのは、父親《おとつ》さんに、貴方に、それから省吾さんと、こう三人なんですか。

オお志保　はあ。ほんとうに御気の毒な様子でしたよ。いろいろ伺って見たいと思って居りますうちに、ハムレット丑松さんはさっさと出て行っておしまいなさる。後で私はさんざん泣きました。

ホ銀之助　そうですかあ。ああ、僕の想像した通りだった。定めしあなたも驚いたでしょう、彼の素性を始めて御聞きになった時は。

オお志保　いいえ。

ホ銀之助　ホウ。

オお志保　今日始めてでもございませんもの。勝野文平さんがどこかで聞いていらしツて、いつぞや私に話しましたんですもの。

ホ銀之助　あの男も饒舌家《おしゃべり》で、ほんとうに仕方が無い奴だ。何ですか、勝野君は何だってまたそんなことを貴方に話したんでしょう。

オお志保　親類はこれこれだの、今に自分は出世して見せるのツて妙な事ばかり言って。

ホ銀之助　今に出世して見せる？そんなことを。

オお志保　それから、ハムレット丑松さんのことなぞ、それは酷い悪口を仰いましたよ。私は、もう口惜しくて、口惜しくて。気の毒でなりません。

ホ銀之助　ほんとに？　ほんとに貴方はそう考えて下さるんですか。僕は、あの友達を助けて頂きたいと思っているような訳ですが

オお志保　助けろと？私に？

ホ銀之助　ええ。実は、この前の宿直の時に、瀬川君の意中を叩いて見たのです。友達というものも有って見れば、力に成るということも有ろうぢゃないか。こう言いました。すると、瀬川君は貴方のことを言出して。僕には貴方を大切に思っているのはわかりました。彼は自分の素性を考えて、到底及ばない希望《のぞみ》と。それで貴方のところに来て、今まで隠していた素性を自白したのです。

もし貴方にあの男の真情《こころもち》が解りましたら、一つ助けてやろうという考えを持って下さることは出来ますまいか。

オお志保　まあ、何と申上げていいか解りませんけれど

シェ藤村　と、オフィリアお志保は耳の根元までも紅《あか》くなって、

オお志保　私はもうその積りで居りますんですよ。

ホ銀之助　一生？

オお志保　はい。あの、御願いで御座ますが、もし「懺悔録」という御本が御座いましたら、貸して頂けませんか。

ホ銀之助　「懺悔録」？

オお志保　猪子さんの御書きなすったとかいう

ホ銀之助　あれですか。よく貴方はあんな本を御存じですね。

オお志保　ハムレット丑松さんが平素《しょっちゅう》読んでいらっしゃいましたもの。

ホ銀之助　承知しました。彼のところに有ましょうから、行って話して見ましょう。もし無ければ、どこか捜して見て、是非一冊贈らせることにしましょう。

シェ藤村　こう言って、ホレーショー銀之助は市村弁護士の宿を指して急いだ。

【18】

ホ銀之助がいる。

ホ銀之助　扇屋では人々が蓮太郎の遺骸《なきがら》の周囲《まわり》に集ったところ。親切な亭主の計いで、焼場の方へ送る前に亡くなった人の魂を弔いたいという。その日の午後東京から着いた蓮太郎の妻を始め、弁護士、ハムレット丑松も居た。

シェ藤村が来る。

シェ藤村　旅で死んだということをことにあわれに思い、扇屋の家の人も弔いに来る。縁もゆかりも無い泊客ですら廊下に集って、寂しい木魚の音に耳を澄す。焼香も済み、新聞の記者も尋ねて来て、聞き取ったことを手帳に書留める。市村弁護士はホレーショー銀之助を部屋の片隅へ招いた。相談というはハムレット丑松の身に関したことであった。

ホ銀之助　市村弁護士の言うには、今となってはこの飯山に居にくい事情も有ろうし、未亡人はまた未亡人でこから帰るには男の手を借りたくも有ろうし、するからして、あの蓮太郎の遺骨を護って、一緒に東京へ行って貰いたいがどうだろう。

シェ藤村　選挙を眼前《めのまえ》にひかえさえしなければ、無論、自身で随いて行くべきで有るが、それは未亡人が強いて辞退する。せめてこの際選挙の方に尽力して夫の魂を慰めてくれと。

ホ銀之助　聞いて見れば未亡人の志も、もっとも。一切の費用は自分の方で持つ。是非。とのことであった。「学校の方の都合は、どんなものでしょう。」と聞かれたので学校の方ですか。実は、彼を休職にすると言って、その下相談が有ったという位ですから、差し支えない。郡視学もその積りで居るそうです。学校の方のことは僕が引受けて、どんなにでも都合の好いように致しましょう。一日も早く飯山を発ちました方が彼の為には得策だろうと思うんです。

シェ藤村　こういう相談をして居るところへ、棺《ひつぎ》が持運ばれた。人々は最後の別かれを告げる為にその棺の周わりに集った。焼場の方へ送られることに成った頃は、もう薄暗かったのである。火を入れるところまで見届けて、焼場から帰った後、皆で火鉢を取囲《とりま》いて、扇屋の奥座敷で話した。飯山病院から追われ、鷹匠《たかしょう》町の宿からも追われた大日向が、実は、追放の恥辱《はづかしめ》が非常な奮発心を起させ、アメリカのテキサスで農業に従事しようという新しい計画を市村弁護士の口を通して、ハムレット丑松の耳に希望《のぞみ》を囁いた。

ホ銀之助　見給え。捨てる神あれば、助ける神ありさ。

シェ藤村　ホレーショー銀之助から聞いたお志保の物語。あの可憐な決心と涙とはどんなに深い震動をハムレット丑松の胸に伝えたろう。ポローニヤス敬之進の病気、継母の家出、そんなこんなが一緒に成って、オフィリアお志保の心情を可傷《いたわ》しく思わせる。

ホ銀之助　絶望し、断念し、素性まで告白して別れた丑松の為に、ひそかに熱い涙をそそぐ人が有ろうとは。

シェ藤村　その翌日、ホレーショー銀之助は友達の為に、学校へも行き、蓮華寺へも行き、オフィリアお志保のところへも行った。蓮華寺にあるハムレット丑松の荷物を取纏めた。ホレーショー銀之助はまた、オフィリアお志保のことを未亡人にも話し、市村弁護士にも話した。

ホ銀之助　女は女に同情《おもいやり》の深いもの。ことにオフィリアお志保さんの不幸な境遇は未亡人の心を動かしたのであった。先々は東京へ引取り一緒に暮したい。ハムレット丑松の身が決まった暁には自分の妹にして結婚させるようにしたい。こう言出した。兎に角、後の事は市村弁護士も力を添える。

シェ藤村　という訳で、万事は市村弁護士とホレーショー銀之助とに頼んで置いて、ハムレット丑松は慌ただしく飯山を発つことに決めた。

【19】

シェ藤村がいる。

シェ藤村　出発の日が来た。夜明け頃から霙《みぞれ》が降出して、扇屋に集る人々の胸には旅の思いを添える。一台の橇《そり》は朝早く扇屋の前で停った。下りた客は厚羅紗《あつらしゃ》の外套で深く身を包んだ紳士風の人、橇曳《そりひき》に案内させて、弁護士に面会を求める。大日向が来た。市村弁護士は出迎えた。大日向は約束を違《たが》えずやって来たので、薄暗いうちに下高井を発ったという。上れと言われても上りもせず、ただ上《あが》り框《がまち》のところへ腰掛けたままで用談を済し、蓮太郎への弔意《くやみ》を述べ、やがて行こうとする。弁護士は丑松のことを語り聞かせた。

ハム丑松が来る。

ハム丑松　霙《みぞれ》はしとしと降りそそいで居た。私は人々と一緒に、先輩の遺骨の後について、雪の上を滑る橇の響を聞きながら、静かに自分の一生を考えながら歩いた。猜疑《うたがい》、恐怖《おそれ》ああ、ああ、二六時中忘れることのなかった苦しみは僅かに胸を離れた。今は鳥のように自由だ。踏む度にさくさくと音のする雪の上は、確かに自分の世界の様に思われた。

シェ藤村　上の渡しの方へ曲ろうとする町の角で、一同はオフィリアお志保に出逢った。

オフィリアお志保が来る。

シェ藤村　ハムレット丑松の紹介で、彼女は始めて未亡人と弁護士とを知った。女同志は言葉を交しながら歩き初めた。

オお志保　上の渡しの長い船橋を越えて対岸の休み茶屋に着いた。そこにはホレーショー銀之助さんが早くから待受けて居た。

シェ藤村　例の下高井の大尽も出て迎える。市村弁護士がハムレット丑松に紹介したこの大日向という人は、見たところ余り価値《ねうち》の無さそうな。田舎の漢方医者とでも言ったような、平凡な容貌《かおつき》で、これがアメリカのテキサスあたりへ渡って新事業を起そうとする人物とは、いかにしても受取れなかったのである。

ハム丑松　言葉を交して居るうちに、私はこの人の堅実《たしか》な、引締った、底の知れないところもある性質を感得《かんづ》くように成った。

シェ藤村　大日向はテキサスにあるという日本村のことを彼に語り聞かせた。

ホ銀之助が来る。

ホ銀之助　かみさん。それでは、さっきのものを、ここへ出して下さい。
シェ藤村　とホレーショー銀之助は指図する。別れの酒をこの休み茶屋で酌交《くみかわ》すのは、送る人も、送られる人も、共に長く忘れまいと思ったことであったろう。
ハム丑松　君、いろいろ君には御世話になった。
ホ銀之助　それは御互いサ。しかし、こうして君を送ろうとは、僕も思いがけなかったよ。人の一生といふ奴は実際解らないものさね。
ハム丑松　いずれまた東京で逢おう。
ホ銀之助　ああ。さあ、なんにもないが一盃飲んでくれ給え。

ポ敬之進が来る。

ポ敬之進　次第に高等四年の生徒が集まって来た。その日の出発を聞伝えて、せめて見送りしたいという心根から、ハムレット丑松を慕ってやって来たのである。ハムレット丑松は生徒たちの間を歩いて、別れの言葉を取り交わした、
シェ藤村　やがて橇《そり》の用意も出来たという。
ハム丑松　御機嫌よう。
シェ藤村　それが最後にオフィリアお志保を見た時の彼の言葉であった。
オお志保　涙が頬を伝って流れ落ちた。
ハム丑松　橇《そり》は雪の上を滑り始めた。

ハム丑松、去る。

シェ藤村　これは過去の物語である。
ポ敬之進　過去には後の時代に取って、
ホ銀之助　反省すべき事柄も多い。
オお志保　過去こそ、真実であるからであろう。

おわり

（戯曲化するにあたりｗｅｂ青空文庫のデータを使用した）